

二松学舎大学大学院文学研究科・大阪大学大学院基礎工学研究科
株式会社 国際電気通信基礎技術研究所 (ATR)

「瀬石アンドロイド」プロジェクト 2024年度 共同研究報告書



二松學舎大學
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

ATR
Advanced Telecommunications
Research Institute International

Contents 目 次

04	漱石アンドロイド 共同研究終結にあたってのご挨拶 学校法人二松学舎 理事長 水戸 英則
05	漱石アンドロイドがつないだ縁 —「漱石アンドロイドプロジェクト」共同研究終了報告 二松学舎大学 学長 佐藤 晋
06	アンドロイドと漱石が出会った場所： 大阪大学と二松学舎大学の文理融合の軌跡 国立大学法人大阪大学 大学院基礎工学研究科長 和田 成生
07	漱石アンドロイド—始まりと今後の展開 学校法人二松学舎 常任理事 西畑 一哉
11	漱石アンドロイドとの9年間 —偉人アンドロイドを制作することの意義とその基本原則— 大阪大学大学院基礎工学研究科 教授 石黒 浩
13	漱石アンドロイド秘話 漫画批評家 夏目 房之介
15	2024年度漱石アンドロイド報告書 あいまいな漱石アンドロイドの「わたし」 二松学舎大学大学院国際日本学研究科 准教授 谷島 貴太
17	漱石アンドロイドとの9年間 二松学舎大学文学部 教授 改田 明子
19	漱石アンドロイドとポスト・ヒューマン 二松学舎大学大学院文学研究科 教授 瀧田 浩
21	文学入門「アンドロイド・コラボ」実施報告 二松学舎大学大学院国際日本学研究科 教授 中川 桂
23	生身の人間・漱石アンドロイドとAI・生成AI 二松学舎大学大学院文学研究科 教授 塩沢 一平
24	推す漱石／推される漱石 二松学舎大学文学部 専任講師 麻生 将
26	点滅する部屋 「人間のようなもの」の写真についての覚書 二松学舎大学文学部 専任講師 楊 駿驍
29	月が綺麗ですね 大阪大学大学院基礎工学研究科 特任准教授 高橋 英之
31	発話する漱石——声の記憶 比較文学者 増田 裕美子
32	実在と虚構のはざまの存在 名古屋大学大学院工学研究科 准教授 小川 浩平
33	アンドロイドと「尊厳」 山口大学時間学研究所 副所長 小山 虎
34	偶然の出会いが生んだ漱石アンドロイドプロジェクト 公益財団法人日本対がん協会 常務理事 石田 一郎 (元朝日新聞社マーケティング本部長)
35	メディアとしての偉人アンドロイド・夏目漱石 株式会社エーラボ 代表取締役 三田 武志
36	帰ってきた漱石—漱石山房記念館でのイベント報告— 二松学舎大学大学院文学研究科 助手 小林 もも花 二松学舎大学大学院文学研究科 助手 関 祐紀
38	漱石アンドロイド研究会としての活動及びYouTube運用 二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科 学生 岸波 玄馬 二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科 学生 鈴木 拓海 二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科 学生 村場 千裕
40	漱石アンドロイド活動一覧

漱石アンドロイド 共同研究終結にあたってのご挨拶

学校法人二松学舎
理事長 水戸 英則



この度、学校法人二松学舎は、創立140周年記念事業の一環として2016年度より進めてまいりました国立大学法人大阪大学との「漱石アンドロイド」共同研究プロジェクトを、2024年度をもって終了することとなりました。この機会に、これまでの活動を振り返り、関係各位に心より感謝申し上げます。

本プロジェクトは、夏目漱石先生の没後100年という記念すべき年に着想され、大阪大学大学院基礎工学研究科と二松学舎大学大学院文学研究科という、国立大学理系研究科と私立大学文系研究科の異例の連携のもと、アンドロイド研究の第一人者である石黒浩大阪大学大学院基礎工学研究科教授の監修を賜り、漱石のご子孫である夏目房之介先生、長年漱石が勤務した朝日新聞社様、アンドロイド製作の専門会社である株式会社エーラボ様をはじめ、多くの関係者のご支援とご協力を得て進めてまいりました。

漱石アンドロイドの外見は、大正元年、漱石45歳時の写真に基づき、朝日新聞社所蔵の「デスマスク」データ、多数の写真との比較、AIによる写真のカラー化技術などを駆使して再現いたしました。音声は、夏目房之介先生の声をもとに人工音声を創作し、衣服は実地調査等を通して当時の姿を忠実に再現することに努めました。また、学生を交えたフィールドワークを実施し、漱石の足跡を辿る貴重な経験を積むこともできました。

このように「漱石アンドロイド」は、教育現場での活用はもとより、漱石に関する新たな文学研究や人物研究、そして人間社会におけるアンドロイドの受容性研究という二つの大きな研究基盤となることを目指してまいりました。

2016年12月に行った完成披露記者会見以降、漱石アンドロイドは様々な活動を展開してまいりました。NHK「おはよう日本」への出演をはじめとするメディアへの露出、アサヒビール大山崎山荘美術館（現：アサヒグループ大山崎山荘美術館）、愛媛県松山市での夏目漱石生誕150周年記念イベント、二松学舎大学でのシンポジウム開催、NHKBSプレミアム「天国からのお客さま」、TBS「世界ふしぎ発見!」、NHK松山放送局開局80周年番組等のテレビ番組への出演、羽二重団子本店での朗読イベント、朝日教育会議2020での渋沢栄一アンドロイドとの共演、日本科学未来館で行われた特別展「きみとロボット ニンゲンッテ、ナンダ?」への出展、漱石山房記念館での「夏目漱石コンクール」表彰式参加や企画展にあわせたイベント実施、二松学舎大学や両附属校での特別授業など、多岐にわたる活動を通して、多くの方々に漱石アンドロイドに触れていただく機会を設けることができました。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大という困難な状況下においても、リモート開催によるイベント参加や日本対がん協会とのコラボレーションなど、状況に応じた活動を展開することができました。

特に、2018年度に開催したシンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?——偉人アンドロイド基本原則を考える」は、アンドロイドの人格権を巡る重要な議論の場となり、その内容は『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』という著書にまとめられ、一部は高校の教科書にも掲載されるに至りました。これは、現代社会におけるAI・アンドロイドの存在意義を考察する上で、重要な示唆を与えるものと考えております。

これらの活動を通して、漱石アンドロイドは、文学研究や人物研究に新たな視点を提供するとともに、人間とアンドロイドの関係性、AI技術の社会における受容性など、現代社会における重要な課題に対する議論を深める役割を果たすことができたと考えております。

本共同研究プロジェクトの終了にあたり、これまでご支援、ご協力いただいた関係各位に改めて深甚なる感謝を申し上げます。この研究を通して得られた知見や経験は、今後の文学研究、人間研究、そしてAI・アンドロイド研究の発展に貢献するものと信じております。

今後とも、二松学舎の教育・研究活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

漱石アンドロイドがつないだ縁

—「漱石アンドロイドプロジェクト」共同研究終了報告

二松学舎大学
学長 佐藤 晋



2016年から始まった大阪大学大学院基礎工学研究科と本学大学院文学研究科の共同研究が、ここに無事終了を迎えたことをご報告いたします。

二松学舎創立140周年を機に始まった「漱石アンドロイドプロジェクト」は、本学の卒業生であり、日本を代表する文豪・夏目漱石をモデルとしたアンドロイドを作って、教育や研究に役立てようという、今までにない試みでした。漱石の素晴らしい文学作品を、若い世代にも知ってもらいたい。そして、アンドロイドを通して、新しい教育の形を作りたい。そう思った思いから、このプロジェクトはスタートしました。

そのような中において、アンドロイド研究の世界的権威である石黒浩教授が在籍する大阪大学大学院基礎工学研究科との共同研究は、プロジェクトにおける、まさに中核を担うものでした。漱石アンドロイドの制作面においては、石黒浩教授そして石黒研究室の皆様には、アンドロイドの「存在感」を追求する上で欠かせない、外見はもちろん動作などにおける操作や技術指導において、多大なるご貢献をいただきました。

また、これまでの共同研究期間中には、両大学が連携した様々な取り組みを行ってまいりました。共同研究の成果を発表するシンポジウムの開催や、活発な意見交換を通じて、アンドロイド研究の発展に寄与することができたのではないかと思います。そして、シンポジウムで得られた知見や成果をまとめた書籍『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』も発行し、広く社会に情報発信することもできました。

そうした様々な活動の中でも、個人的に思い出深いものの一つに、2017年に私の地元である愛媛県松山市で開催したイベント「おかえりなさい!夏目漱石先生～漱石アンドロイドから未来へ～」があります。当時私はキャリアセンター長という役職についていたのですが、参加した教職員から、地元の皆様に大変温かく迎えていただいたと報告を受けました。そして、地元に住む私の家族からは、イベントに参加した際の写真が届きました。その時私は、漱石アンドロイドがつないでくれた縁のようなものを感じたことを覚えています。

今回の共同研究終了は、一つの区切りではありますが、この共同研究を通して得られた経験は、今後の教育研究活動に活かされ、本学のさらなる発展へとつながっていくものと確信しております。

この場をお借りして、大阪大学大学院基礎工学研究科、石黒教授、そして石黒浩研究室の皆様、心より感謝申し上げます。皆様の多大なるご尽力とご協力なくして、このプロジェクトの成功はあり得ませんでした。

そして最後に、本プロジェクトにお力添えをいただいております関係者の皆様、特に、漱石の孫である夏目房之介先生に、改めて御礼申し上げます。夏目先生には、漱石アンドロイドの合成音声を作るうえで欠かせなかった声の提供、加えてプロジェクトの顧問という形で、現在も多大なるご協力をいただいております。また、学生たちによる「漱石アンドロイド研究会」も活発に活動してくれました。このプロジェクトで得た知見や経験をこれからの人生にぜひ生かしてほしいと思います。

今後も、二松学舎大学は、時代とともに変化する社会のニーズに応えながら、教育・研究機関としての使命を果たし、学術の発展と社会貢献に尽力してまいります。

アンドロイドと漱石が出会った場所： 大阪大学と二松学舎大学の文理融合の軌跡

国立大学法人大阪大学
大学院基礎工学研究科長 和田 成生



「漱石アンドロイド」プロジェクトは、夏目漱石を卒業生に持つ二松学舎大学大学院文学研究科と、最先端の科学技術を探求する大阪大学大学院基礎工学研究科との間で、前例のない文理融合型の共同研究として始まりました。没後100年となる文豪をアンドロイドとして甦らせることにより「夏目漱石」像を探し、また「未来の教育」の扉を開くという壮大なテーマを掲げた本研究は、一見すると相容れないように思える二つの学問領域が融合した、基礎工学研究科としても非常に興味深いものです。

二松学舎大学が長年にわたり培ってきた夏目漱石文学研究と、大阪大学が世界に誇るアンドロイド技術というこの異色の組み合わせは、両大学が共有する「人間とは何か」という根源的な問いへの飽くなき探究心こそが原動力であったと思います。

研究開始当初は、互いの専門用語や文化の違いに戸惑うこともあったと思いますが、熱意あふれる議論を重ねる中で専門分野の壁を乗り越え、互いの視点や発想の豊かさに気づき、深い尊敬の念を抱くようになったことと思います。漱石研究者は、これまで想像の世界に留まっていた漱石にアンドロイドという新たな身体を与えることで、作品世界をより深く理解できる可能性を感じたことでしょう。一方、アンドロイド研究者は、漱石を再現する過程で人間自身を理解する貴重な機会を得ました。

アンドロイドによる漱石作品朗読会やアンドロイド演劇の上演といった、従来の学問の枠組みを超えた独創的な試みは学内外から大きな注目を集め、文理融合による新たな学問領域の開拓として高く評価されました。特に、アンドロイドが漱石作品を朗読する姿は多くの人の心を揺さぶり、また、アンドロイド演劇においては、漱石アンドロイドの繊細な感情表現や在りし日の漱石を彷彿させる仕草が観客に驚きと感動を与えるとともに、人間とアンドロイドの境界線について改めて考えさせる機会を提供したことでしょう。

これらの活動は、単なる学術的な成果に留まらず、社会に対して「人間とは何か」「人間と技術はどのように共存していくべきか」といった重要な問いを投げかけるものでもありました。その意味で、本共同研究は、文理融合という枠組みを大きく超え、広く社会に影響を与える画期的な試みであったと言えるでしょう。

共同研究は惜しまれつつも一旦の終焉を迎えましたが、両大学の関係者たちの間には、この貴重な経験を未来へと繋いでいきたいという強い思いが育まれていると思います。この共同研究を礎とし、更に多くの分野の研究者が集い、新たな文理融合プロジェクトが生まれ、人間理解を深める挑戦が続けられていくことを期待してやみません。

最後になりましたが、本共同研究の推進にあたり、多大なるご尽力とご協力を賜りました関係各位に心より感謝申し上げます。

漱石アンドロイド —始まりと今後の展開—

学校法人二松学舎
常任理事 西畑 一哉



1. 不思議な縁による始まり

私の実家は3代続いた教師の家系で、それぞれの部屋の本棚に本が溢れていた。世界文学全集、日本文学全集、漱石をはじめとする個人全集、ハヤカワSF全集、タイムライフ人間世界史……。本に囲まれた幸せな少年時代を過ごした。中でも漱石は常に身近な存在だった。

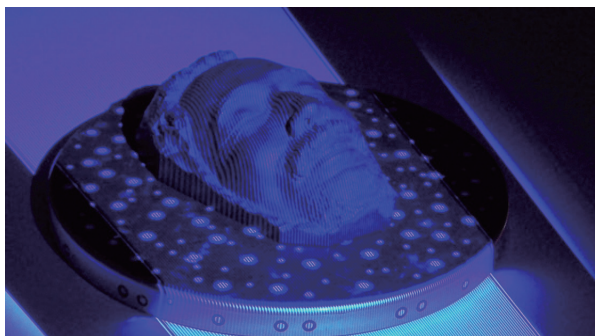
2015年9月に企画財務担当理事として二松学舎に着任した。着任早々水戸英則理事長から、「2017年に二松学舎は創立140周年を迎えるので、しかるべき人に記念講演してもらうことを考えてほしい」との指示を受けた。本学の歴史・伝統に関連し、それなりに名の通った人をお願いする必要があった。二松学舎に関連する有名人となると、難しい課題だと思っていた。

2015年12月に私の出身大学である大阪大学の東京合同同窓会「大阪大学の集い」が東京学士会館で開催された。総長を囲んで各学部の同窓生が集合したが、たまたま私が総会全体の乾杯の音頭をとることになっており、隣に大阪大学大学院基礎工学研究科の石黒浩教授が、講演講師として着座されていた。石黒教授の講演は、アンドロイドを用いての実験と人間の反応をつぶさに分析したもので、素晴らしいものだった。最後に石黒教授が「アンドロイドの研究は、究極のところ人間とは何かを知るために行っているのだ」という話を聞いて、感銘を受けた。

その時、閃くものがあった。夏目漱石は二松学舎の卒業生であり、日本を代表する文豪である。その夏目漱石をアンドロイドの形で復活させてみることはできないだろうか。二松学舎創立140周年の記念講演者として夏目漱石ほど相応しい人物はいないはずだ、と。

夏目漱石は、様々な著作物からもうかがえるように、幼少期から漢詩や漢文に惹かれた少年であった。少年漱石は、1881年（明治14年）、“漢学塾・二松学舎”の門をたたき、約1年間、創立者である三島中洲先生のもとで漢詩文（論語、唐詩等）を学んでいる。

講演後の立食パーティーの際に、それとなく石黒教授に、偉人をアンドロイドで復活させることはできるかという問いかけをした。石黒教授からは、写真等が残っていれば可能だが、その偉人の子孫などがある場合、復活させる際に了解をとる必要があること、音声を使用する場合どのような声にするかということも課題になるということだった。この「大阪大学の集い」には朝日新聞社の石田一郎本部長（当時）も参加されていた。漱石はかつて朝日新聞社員であったことも想起した。



朝日新聞社から提供を受けた夏目漱石のデスマスクを3Dスキャンしてアンドロイドの頭部を作成した。

翌年正月休み明けに、石黒浩教授と石田一郎氏に「夏目漱石のアンドロイドを作成するプロジェクトを立ち上げるつもりなので協力していただきたい」と連絡した。石田氏は当初、突飛なことをいう人だなと思われたのか、一瞬躊躇されていたようだが、すぐに協力の意思と朝日新聞社内の調整を約束してくれた。しかも、朝日新聞社が保有する漱石のデスマスクの利用許可についても尽力していただいた。こういう縁があって漱石アンドロイドプロジェクトが少しずつ進み出したことを不思議に思うと同時に、石田一郎氏と朝日新聞社には感謝しきれない。

夏目漱石のアンドロイドを作成する際には、作成の了解をどのように、誰から得たらいいのかという難問があった。石黒教授との間では、当初有識者から構成する委員会を作り、そこで了承を得るという案も検討したが、やはり遺族の感情が一番重要だということになった。

夏目漱石の孫である夏目房之介氏には、アンドロイド作成の許諾を得るとともに、アンドロイドの音声を作成するために不可欠な「音素登録」の協力を依頼し、承諾をうけた（2016年4月5日）。当初、房之介氏に漱石アンドロイドを作るといった話を打診したときには、房之介氏はあまり乗り気ではなかったように感じていた。房之介氏と面会した際、漱石アンドロイドのプロジェクトを監修するのは、石黒浩教授であることを伝え、房之介氏は急に乗り気になられた。聞くと、ところによると、当時TVで放映されていた「マツコロイド」の大ファンで、番組に出ている石黒教授にも是非会ってみたかったとのことであった。このことも不思議な縁を感じたことである。

また、夏目漱石の孫の一人である、半藤末利子氏を訪ね、アンドロイド作成の許諾を得た（2016年6月3日）。実は数年前に、半藤末利子氏の夫である半藤一利氏に、本学の校内紙に漱石関係の文章を掲載していただいたことが契機になっている。このように、漱石アンドロイドプロジェクトの始まりは、様々な偶然とそれを繋いでいただいた人と人との不思議な縁に彩られていたことに、今更ながら驚きと感謝を隠せない。

2. 漱石アンドロイドの運用

2016年12月8日に漱石アンドロイド完成披露の記者会見を行い、その席では、漱石アンドロイドが、自己紹介と『夢十夜』の「第一夜」朗読を披露した。翌12月9日、漱石の没後100年に当たる日に、NHKの「おはよう日本」に出演した。また、民放各社の報道番組でも漱石アンドロイドの制作が紹介された。

その後、漱石アンドロイド完成以降、9年間に亘り、様々な分野やイベントで活用してきた（イベント一覧表参照）。そうした中で、印象に残っているイベントを挙げてみたい。

（1）松山市での講演

2017年11月23日から26日にかけて、松山市等からの招聘により、漱石アンドロイドが松山を訪問した。松山市役所での野志克仁松山市長表敬訪問を皮切りに、様々な講演を行ったが、何といても松山東高校（小説「坊ちゃん」のモデルとなった旧尋常中学校）での訪問講演の際には驚かされた。松山東高校では講堂に集合した全校生徒から熱狂的な歓迎を受け、講演実施後も多くの生徒が講堂に残り、漱石アンドロイドではなく「夏目漱石」そのものという受け止め方であった。後日の感想でも、「アンドロイドではなく夏目漱石先生そのものが講演されていたように思えた」とか「漱石先生に出会えて本当に嬉しい」といった声が多く聞かれた。また、同校内にある旧藩校の施設「明教館」でも一般市民向けの講演を行ったが、秋山好古、秋山真之、正岡子規などの松山東高校卒業生の肖像の下での講演は、正に「夏目漱石」本人が話しているという錯覚を受けた。



松山東高校明教館（旧藩校）での講演

（2）アンドロイド演劇『手紙』の上演

2018年8月26日に、二松学舎大学で、「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？——偉人アンドロイド基本原則を考える」とのテーマでシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、劇作家の平田オリザ氏作・演出のアンドロイド演劇『手紙』が初演された。平田オリザ氏には暑い夏の間シナリオとアンドロイドの動きをチューニングするため、本当に頑張ってもらった。

『手紙』は、夏目漱石（漱石アンドロイド）と正岡子規（青年団の井上みなみ氏）の対話により進行する劇で、来場者から好評を博したことはもちろん、NHKや各新聞社でも数多く報道された。筆者も人間とアンドロイドの対話による新しい芸術表現の素晴らしさに感銘を受けた。

シンポジウムでは、その後、漱石の孫である夏目房之介氏、著作権の第一人者である福井健策弁護士、石黒浩教授、前出の平田オリザ氏に二松学舎大学の研究者が加わり、夫々の観点から、アンドロイドの持つ人格権等について多彩で、深い議論を繰り広げた。このシンポジウムの議論の様子は、その後『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？』という著作として結実している。



『手紙』の模様

（３）NHK番組「天国からのお客さま」への漱石アンドロイド出演（2018年10月20日）

NHKBSプレミアムで2018年10月20日に「天国からのお客さま」という番組が放映された。この番組の中で、漱石アンドロイドは、芥川賞作家の奥泉光氏、作家のいとうせいこう氏に対し、夏目漱石の「文学論」を解説し、難解な漱石「文学論」を解きほぐすという役を演じた。

漱石アンドロイドのパートの放映時間は30分弱であったが、収録過程では、3時間に亘り、奥泉光氏、いとうせいこう氏との濃密な議論が展開された。



「天国からのお客さま」関係写真

©NHK／テレビマンユニオン

©NHK／テレビマンユニオン

（４）渋沢栄一アンドロイドとの共演

2020年12月12日に二松学舎大学で開催（リモート開催）された、朝日教育会議2020「渋沢栄一『論語と算盤』から生まれる未来」において、漱石アンドロイドと渋沢栄一のアンドロイドの共演が実現した。

渋沢栄一は、紡績・金融・電力・保険等500以上の企業の立ち上げを行い、商工会議所を設立するなど「近代日本経済の父」とも言われる巨人だが、商法講習所（現一橋大学）、日本女子大学校（現日本女子大学）の経営・支援など、教育分野でも大きな足跡を残している。

特に、二松学舎の学祖である三島中洲とは、渋沢の妻の墓碑銘を三島が撰文するなど個人的に極めて親しかった。また思想的にも、三島の「義利合一論」と渋沢の「道德経済合一説」は同根ともいえるものであり、渋沢の代表作『論語と算盤』も三島と渋沢の対話から書き始められている。こうしたこともあり、渋沢は三島没後、二松学舎の第三代舎長に就任し、漢学塾の後進である二松学舎専門学校の設立に奔走するなど、二松学舎にとっては恩人ともいえる重要な人物である。

2019年7月に深谷市の副市長と教育委員長が二松学舎を来訪され、漱石アンドロイドの運用状況を見学された。深谷市は渋沢栄一の生まれ故郷である。深谷市では、郷里の偉人である渋沢栄一のアンドロイドを制作し、渋沢栄一記念館等で活用する計画を立てており、「偉人アンドロイド」の「先駆」である漱石アンドロイドの運用状況を実見することが目的であった。



渋沢栄一アンドロイドと漱石アンドロイドの共演

深谷市では、同市出身の鳥羽博道氏（株式会社ドトールコーヒー名誉会長）が制作資金を寄付、漱石アンドロイドと同様に大阪大学大学院基礎工学研究科石黒浩教授監修の下、株式会社エーラボが制作することとなった。

このような経緯もあり、朝日教育会議2020「渋沢栄一『論語と算盤』から生まれる未来」において、二松学舎の卒業生である夏目漱石のアンドロイドと二松学舎第三代舎長である渋沢栄一のアンドロイドの共演が実現した。アンドロイドの共演という新しい方式によるメッセージの伝達という可能性を示すことができたように思う。

重ねて、二松学舎の恩人ともいべき渋沢栄一の深い恩顧・縁を感じた次第である。

（５）日本対がん協会とのコラボレーション

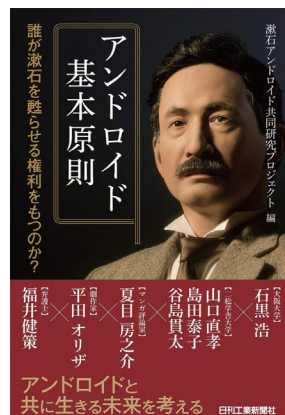
2021年は石田一郎氏とのご縁で、公益財団法人日本対がん協会とのコラボレーションが実現した。11月13日に二松学舎大学附属柏中学校において、中学生を前に、山王病院副院長の奥仲哲弥医師と漱石アンドロイドががん予防や検診の重要性をめぐって、対話を繰り広げた。2020年度からの新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、人間ドック等におけるがん予防検診の動きが極端に鈍っており、このままでは数年後にがん患者の急増を招きかねないとの懸念があり、日本対がん協会として、がん予防検診を積極的に呼びかける必要があったものである。

3. 『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』に関する教科書の掲載について

2018年8月26日に、二松学舎大学で「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?——偉人アンドロイド基本原則を考える」とのテーマで開催されたシンポジウムの模様は、『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』という著作にまとめられているが、このうち、谷島貴太二松学舎大学文学部准教授の文章が、高校の国語の教科書（東京書籍・現代国語）に掲載された。

また、同じシンポジウムにおいて、劇作家平田オリザ氏作・演出のアンドロイド演劇「手紙」が初演されているが、この「手紙」についても、高校の教科書（大修館書店・文学国語）へ掲載されている。

現在の中高生が成人し、社会人として活躍する頃には、AI・アンドロイドが、日常生活や企業活動に幅広く浸透していることが予想される。そういった社会における、「人間とアンドロイド」「人間とAI」の在り方を探る意味で、重要で普遍的なテーマとなっていくのではないだろうか。



『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』

4. 今後の漱石アンドロイド

漱石アンドロイドは、EXPO2025大阪・関西万博で、石黒浩教授が主催するシグネチャーパビリオン「いのちの未来」に出展予定である。技術の進化により人間とロボットの境界がなくなり、「新しいいのち」の可能性を知ることを探るといこのパビリオンのテーマ自体が、今後の漱石アンドロイド研究の方向性を示唆しているといえよう。

漱石アンドロイドには、高度な機能を持つAIを搭載することが望ましい。生成AIに代表されるAIの近年の進歩には目を見張るものがあるが、漱石アンドロイドにAIを搭載することによって、予め用意されている受け答えではなく、自律型での対話が可能になる。人間との自由な対話ができるようになれば、漱石アンドロイドの研究の幅も今より格段に広がるだろう。多言語対応も考慮すべきである。

大阪大学の石黒浩研究室では、既に石黒浩教授に似せたアンドロイド（ジェミノイド）にAIを搭載し、石黒教授が過去に話した講演や執筆した本を学習させることによって、先生に代わって学生の質問に答えられるレベルまで達しているとのことである。

また、研究分野で言えば、これまでの文学研究分野のみならず、国際政治経済学部を担当分野や今後検討されるであろう二松学舎大学の新学部の新学問分野にも対応できるようにすべきである。

以 上

漱石アンドロイドとの 9 年間

—偉人アンドロイドを制作することの意義とその基本原則—

大阪大学大学院基礎工学研究科

教授 石黒 浩



2016年に始まった漱石アンドロイドプロジェクトであるが、気が付けば既に9年経過した。その間、漱石アンドロイドは我々プロジェクトの中で、いろんな人々と関わり、その存在を伝えた。そうした人々に、漱石先生はアンドロイドとして蘇り、新たな影響を与え続けてきたのである。無論その影響の与え方は、生前の漱石先生とは異なるものである。

漱石アンドロイドは、漱石先生本人の全てを再現したものではない。漱石先生の小説や手記など特定の作品を読み上げたり、それらを基にした演劇に出演したりしたにすぎないのである。しかしながら、漱石アンドロイドを目の前にすれば、漱石先生の存在感を感じることができ、その存在感から漱石アンドロイドの言葉に多くを考えられる。アンドロイドとして蘇った漱石先生は、生前の漱石先生とは異なる、また新たな漱石先生として人々に影響を与えることができたのである。

本稿では再び初心に戻り、漱石アンドロイドのような偉人アンドロイドを制作することの意義を思い出してみたいと思う。

アンドロイドとは、しゃべって動く銅像のようなものでもある。まずは動かないアンドロイド、すなわち銅像の意味から考えてみよう。

亡くなった人のアンドロイドを造ることは、いわばその人の銅像を造ることに似ている。しかしながら、銅像と全く同じではない。アンドロイドの場合、しゃべったり動いたりするので、銅像以上に造る手間暇がかかる。その一方で、銅像とは比べものにならないくらいに人間らしくなる。そして当然のことながら、何をしゃべらせるのか、どのように動かすのかが問題になる。本人らしくするには、しゃべる内容や動作は慎重に選ばなければならない。

なぜ銅像は人類の歴史の中で造られ続けてきたのだろうか。大抵の銅像は最もその人らしい姿形で造られている。そして、その銅像を見る人たちは、その姿形からその人が何をしてどのように振る舞ったかを想像する。この想像において人間は多くの場合、ポジティブに想像する。すなわち、その人から聞いた心打つ言葉や、生前に好ましく思っていた動作を思い出すのである。このように、亡くなる前よりも銅像になってからの方が、人々から好意的に受け入れられるのである。

そして、その銅像が偉人のものであれば、人々のポジティブな想像はさらに高まる。偉人にももちろん、個人的な側面と社会的な側面があり、個人的な側面においては普通の人とさほどの違いが無いかもしれない。しかし、社会的な側面においては、普通の人とは比べものにならないくらいポジティブで偉大な想像をもたらす。

このような偉人の銅像をアンドロイドにする場合、その偉大な想像を壊さないアンドロイドにしないといけない。言葉を発して体を動かすことができるアンドロイドの存在感は、生きている人間に非常に近い。幾ら見る側がその偉大さに感動したいと思っていても、アンドロイドが馬鹿なことを言ったり、愚かな行動をしたりすれば、その偉大さは吹き飛んでしまう。瞬時に見る側の夢が覚めるだろう。

また、偉人が偉人と言われる由縁は、社会の広い範囲において尊い存在と認識されてこそ偉人である。故に、偉人をアンドロイドにするのであれば、当然その社会的人格をもとに、アンドロイドの発話や動作を設計すべきである。しかしながら、個人的な人格を全く見せないアンドロイドは人間的にはならない。それ故、適度に個人的な人格も表出させる必要がある。

ただし、個人的な人格の表出には細心の注意が必要である。それは本人や家族のプライバシーに関わる。亡くなった人間のプライバシーはどれほど守れるべきなのか、そのプライバシーを守る権利は存在するのだろうか。この答えは専門家に委ねるしかないのであるが、少なくとも、人が傷つくようなことになってはいけない。その偉人のプライバシーがあらわにされて、親族が精神的にショックを受けることもあろう。

しかし、一方で個人的人格を表出させることで、親族に喜ばれる場合もあるだろう。普段、あまり個人的人格を見せることがなかった偉人が、アンドロイドになって、多少個人的人格を見せるようになり、より親しみが湧くということは十分にありえる。どのような場所でどのような人がいるときに、どれほど社会的人格を表出し、どれほど個人的人格を表出するか、それらを丁寧に制御することが必要になる。

では、社会的人格とはどのようなものであろうか。社会の中で多くの人に共有されている偉人の人格は、先ほど述べたようにほとんどの場合ポジティブなものである。これは私のロボット研究でも用いている仮説であるが、「人間は情報が足りない場合、自分の理想に合わせて、足りない情報をポジティブに補完（穴埋め）する」という仮説がある。

偉人の社会的人格の場合、その偉人の偉さを正確に判断できる者は、実のところそれほど多くないと思われる。大抵の場合は、「他の人が偉いと言っているので、偉いのだろう」と考える人が多いのではないかと思う。足りない情報をポジティブに補完するという人間の性質に加えて、みんなが信じていることを自分も信じるという、人間の社会的な性質が重なって、偉人の偉大さは社会の中で共有されているのだろう。

このようにして、偉人はその個人的人格を超えて、また時のその業績を超えて、遙かに尊い存在として、社会の中で認知されるようになる。そして、多くの人の心の支えや、人生の目標になっていくのである。すなわち偉人とは社会の中で、人々のポジティブな想像を喚起しながら、人々の生きる支えになるものであり、偉人アンドロイドもその性質を受け継がなくてはならない。

このようにして、偉人はアンドロイドになることによって、さらに社会的に理想的な偉人へと生まれ変わる可能性がある。我々偉人アンドロイドの制作を手がける者の使命は、偉人の社会的人格をより尊いものにし、偉人を敬愛する人々だけでなく、一般の人々にもポジティブな影響を与えるようにすることだと考える。

以上の議論を踏まえて、私の考えるアンドロイドの基本原則とは、次のようなものである。

第一条 社会的人格を表現するものでなければならない。

第二条 社会で許容され難い個人的人格を再現してはいけない。

第三条 人々のポジティブな想像を引き出し、人々に対話できる偉人として、ポジティブな影響を与えるものでなければならない。

偉人はアンドロイドになることによって、その社会的人格が強化され、偉人本人よりも尊い存在になる可能性があるのだが、このことは、アンドロイドになることによる進化とも考えられる。無論、発話や動作を十分偉人らしく設計する技術が完成し、また、対峙する人を偉人アンドロイドが、人間と同レベルで正確に認識し、その認識に基づいて、人間らしく対話できるようになるということが前提である。

そのような技術は、近年のAI、特に大規模言語モデルによって、実現することができるようになった。私が研究室で研究開発を続けているジェミノイドには、私が書いた多数の本やメディアインタビューを基に、大規模言語モデルで対話できる機能が実装されている。このジェミノイドは、記者や学生から与えられる質問に対して、私のように答えることができる。むしろ、その回答は私以上である。完璧な記憶を基に正確に私の意見を伝えることができるのである。

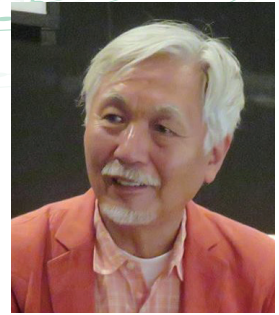
すなわち、偉人はアンドロイドになることによって、さらに社会の中で進化していける可能性がある。

このようなアンドロイドの研究をして、よく聞かれる質問は、「人間はアンドロイドになることによって、死ななくなりませんか？」というものである。アンドロイドは機械であり、機械にも寿命がありいつかは壊れる。そう考えれば、アンドロイドには明らかに寿命がある。そして、その寿命は現在のところ、人間よりも遙かに短い。しかし、今後技術が進めば、その寿命は人間よりも遙かに長くなる可能性がある。ただ、それでも寿命はあるだろう。

とはいえ、その長い寿命は人間にとって憧れになる。非常に極端な考えかもしれないが、「人間はアンドロイドになるために生きている」と言ってもいいのかもしれない。偉業を直し遂げ、その社会的人格を基に、アンドロイドとして社会の中で一般の人間よりも遙かに長く生き続ける。人間がより長い寿命を求めるなら、このことが、人生の目的になってもおかしくないように思える。

漱石アンドロイド秘話

漫画批評家
夏目 房之介



2016年1月、二松学舎からアンドロイド研究の石黒浩教授（大阪大学）に、「漱石アンドロイド」制作についての相談があり、企画が進められた。そこで「漱石アンドロイドの制作について誰にどのように許諾を得れば良いのか」という議論があった（註1）……らしい。半藤末利子さん（漱石長女の娘）と私（長男純一の息子）のところに話があり、もちろんOKした。私は日本テレビの『マツコとマツコ』（2015年）という番組が好きで、マツコ・デラックスとマツコロイド及びアンドロイドの制作者として登場する石黒教授の変人ぶりの虜になっていたのも、一も二もなく承諾したのであった。ただただ面白そうだったからだ。

そもそも漱石の著作隣接権（ドラマ化などの翻案の権利）はとっくの昔に切れており、それ以前に作品の引用参照は法で認められている。私が口を挟むような事柄ではない（法的には著作人格権は残っており、例えば肖像の悪用などを名誉毀損で訴えることは可能だろうが）。そもそも、漱石はすでに日本中の知る文化的共有物となっており、孫がそこで何か権利を主張したりすべきではない、という立場を私はとっている。したがって、ほとんどの「許諾申請」はOKしてきたし、アンドロイドに関しても同様だった。

私のところには、やれCMIに漱石や彼の文章を使いたいとか、肖像を使いたい、はたまた雑司ヶ谷の墓を撮影して記事にしたいなど、無数の「許諾依頼」が、それまでもきていた。そんな許諾申請もなく、勝手に使われている場合はもっと多いだろう。漱石は国民的な娯楽消費文化の一部となっており、もともと娯楽メディア体質の私は、それを楽しんでもいた。

そんな私がミーハーにOKしたら、いつの間にか私は「漱石アンドロイド運営委員会」の一人になっていた。漱石遺族の一人が名を連ねることで、あらかじめ世間から文句の出ないようにしておきたかったのかもしれないが、それでも私はかまわなかった。ただ、自分が役に立つかといえば、多分何も出来ないだろうと思った。無責任に面白いことを書き、描いたりしてきた私に、実務能力を期待されても困る。ただ広報の効果には役立つだろう。

やがて、私は漱石アンドロイドの声の制作に駆り出されることになった。私の声を音素に分解し、それを再構成してアンドロイドの発語に使うという話だった。全然やったことのない仕事で、私は漱石の「声優」になってしまったのである。面白い体験だったが、大変でもあった。何度も録音スタジオに雪隠詰めになり、様々な文章を長時間読まされ、さらには英語の原稿まで読まなければならなかった。英語は日常会話もおぼつかず、旅行者として最低限の話しかできない。米語教育で育ったので、「CAN」をついつい「キャン」と発音しては、「先生、カンでお願いします」と繰り返しダメを出

された。あんなに普段使わない脳を使ったことも、あまりない。

私は図々しくも、会ったこともない祖父についての講演なんかも引き受けることがある。そこで聴衆に「あたしが話してることはほとんど何かの書物に載ってます。ただ、漱石と父純一と私の顔の骨格はそっくりです（事実、漱石のデスマスクと私が居眠りしている写真を並べると、本人がびっくりするほど同じ）。ということは、恐らく声帯も似てるんですね。だから、今日みなさんがお聞きになった声は、ひょっとしたら…ひょっとしたらですよ？ 漱石の声に近いかもしれないんです」というのをオチにして



emi撮影 漱石デスマスクとうたたねの私

いた。まさか本当に私の声で漱石がしゃべるとは思わなかった。当たり前だが声優は、非常に難しい仕事であって、あれがうまくいったとはとても思えない。その後類似の仕事も来ないし。遺族や友人で漱石アンドロイドの話すのを聞いた連中は、口を揃えて「何だ、夏目の声じゃん」などと落胆の声をあげることとなった。

私は再現された漱石に、彼が好きだった落語を語らせたらどうかなどと、ラチもない提案をしたりしていたが、一度シンポで「漱石は銅像のように正しい偶像になるべきだ」との発言があったときは、「「漱石の偶像化」への疑義」という文をネット公開し、のちに『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』という本に再録された。偶像となった漱石の存在で若い頃さんざん嫌な思いをした私の本音だった。

漱石アンドロイドとつきあう中で、私にとって彼が身近なものになったかといえば、むしろ逆だった。祖父としての親しみが生じるのではという期待に反して、私にとってアンドロイドはついに人格としてのリアリティを持たなかった。彼はあくまで機械にしか見えなかった。学生たちを相手にアンドロイドが対話する実験を見たときは、彼が必然的に権威化し、威圧的にすらなることを知った。自身大学教授を経験して、学生にとって教授は必然的に権威と威圧を身にまとうてしまうと知った。学生の態度はそれに影響され、教授の期待する発言をしようと萎縮し習慣化してしまう。アンドロイドの発言は裏でスタッフがキーボードに打ち込み、定型的な発言を組み合わせで私の声で再生される。しかし、対面のコミュニケーションで相手をリラックスさせ、話を面白くしていく工夫は、残念ながらなされていたとは思えない。アンドロイドにはコミュニケーションについての学習が必要だと思われる。

その点では、現在のAIによる応答の試みは重要な示唆を与えるのかもしれない。ただ、私自身はAIをほぼ利用していないので、何かいうことはできない。私は半世紀以上のインタビューや対談座談など、あるいは日常会話での経験から、漱石アンドロイドにはもっとゆるい応答やボケの要素があってよいと思ってきた。一方で漱石は明治大正時代の人であり、いきなり現在の受容層相手に当意即妙な対応ができるほうが不自然でもある。マツコの場合は現在実在する人物であり、マツコロイドの声はものまね芸人がマツコの真似をしながらアドリブで対処していた。これがあの番組が成功し、面白かった理由だったのではないか。

漱石アンドロイドは、機械が完成してから現場での応答や動作のフィードバックを重ね、将来的にはAIの搭載も考えられていた。彼はじつは生成実験過程だったのである。私はその発想が好きで、面白いと思ってきた。漱石アンドロイドが今後どのような過程をたどるのか、私にはわからないが、いつの日か私が祖父としての親近感を抱くような存在になってくれれば楽しいかと思う。

註1 西畑一哉「はじめに」『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』日刊工業新聞 2019年 P.5

2024 年度漱石アンドロイド報告書

あいまいな漱石アンドロイドの「わたし」

二松学舎大学大学院国際日本学研究所

准教授 谷島 貫太



漱石アンドロイドがはじめて公的な場で言葉を発したのは、2016年12月8日のことでした。その第一声はこうです。

座ったままで失礼します。皆さんご無沙汰ですね。ほぼ100年振りというところでしょうか。昔、『夢十夜』という小説の中で、『100年待っていてください。きっと会いに来ますから』というセリフを書いた覚えがありますが、100年待っていて頂いてありがとうございます。

その後、漱石アンドロイドは色々な場面で、さまざまな種類の発話を行ってきました。上のような自己紹介や漱石作品の朗読、入学式などのイベントでの挨拶、またシンポジウムで登壇者と疑似的な掛け合いをしたこともありました。漱石アンドロイドをめぐる共同研究プロジェクトは、2024年度いっぱいでは終了となります。その活動の振り返りとして、漱石アンドロイドが生み出してきた言葉の特殊性について改めて考えてみたいと思います。

※

2024年10月19日の土曜日、漱石アンドロイドは東京都新宿区にある漱石山房記念館で開かれた朗読イベントに参加しました。漱石の小説『三四郎』に出てくる三四郎のモデルとされる、小山豊隆を取り上げた特別展と連動したイベントです。漱石アンドロイドは『三四郎』の一節を朗読しました。その朗読に至る前段で、漱石アンドロイドは次のような発話を行いました。

改めまして、今日は特別展『『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆』にお招きいただき、ありがとうございます。小宮は、わたしの門下生であり、木曜会にも参加していました。小宮は『三四郎』の主人公である小川三四郎のモデルのひとりだと言われることがあります。実際、小宮自身も最初の三四郎が汽車に乗っている場面を読んだ時に、「自分のことではないか」と思ったそうです。

まずはこの漱石アンドロイドによる発話の〈内容〉に着目してみましょう。そこでは小宮豊隆が小川三四郎のモデルだとされていること、そして小宮自身が三四郎という登場人物に対して感じたことなどが言及されています。次に発話の〈形式〉に目を向けてみましょう。たとえば「小宮は、わたしの門下生であり」と述べられている箇所。ここでは小宮豊隆が漱石の門下生であったという事実が、「わたしの門下生」という形式で述べられています。この箇所には「わたし」という一人称が登場しています。「わたし」や「あなた」といった人称代名詞は、「これ」や「あれ」、「さっき」や「あとで」などと同様に、その発話が行われた文脈がわからないと、その言葉が指し示す対象が確定しないという性質を持ちます。このような文脈依存的な指示詞を、ダイクシス（直示）と呼びます。

文脈に依存して指示作用を発揮するダイクシスは、適切な文脈で使用されることを要求します。「さっき3時になった」という発話は、3時をちょっと過ぎたタイミングでないと適切なものとなりません。同様に、小宮豊隆を「わたしの門下生」と表現する発話は、実際に小宮とそのような関係にあった夏目漱石によって発せられないと、適切なものにはなりません。そこで疑問が頭をもたげます。漱石アンドロイドが発する「わたしの門下生」は適切な発話でしょうか。なぜなら漱石アンドロイドは、いうまでもなく漱石本人ではなく、さらには人間でもないからです。とはいえ、この疑問はすぐに引込みます。というのも朗読イベントの会場にいた誰一人として、その発話の適切さに疑問を持ったようには見えないからです。漱石アンドロイドによる「わたしの門下生」という発話は、とにかく問題なく機能します。

もちろん漱石でない人間が、漱石の立場で「わたし」と発話すること自体はそこまで特異な事柄ではありません。漱石を登場人物とするドラマの中で俳優が漱石として語ったり、あるいは漱石をアニメキャラクターとして一人称で語らせたり、といったことはいくらかでも可能ですし、すでにたくさんなされてきました。しかしそれらの事例と、漱石アンドロイドによる

「わたし」という発話には、明らかに違いがあるように思われます。というのも朗読イベントの参加者は、漱石アンドロイドの言葉を、〈いくぶんか〉は漱石本人の言葉として受け止めている節があるからです。たとえばイベントの終了後には撮影タイムというものが設けられ、参加者たちは歓声を挙げながら漱石アンドロイドと一緒に写真に収まっていた。その写真撮影イベントは、彼／彼女たちにとって、やはり〈いくぶんか〉は「漱石先生と写真を撮った」という出来事として体験されているようでした。漱石が登場人物として登場するドラマの漱石役の俳優と記念写真を撮ったとしても、「漱石先生と写真を撮った」と感じる人はほぼいないでしょう。アニメ化されたキャラクターの場合もそうだと思います。しかし漱石アンドロイドの場合、どうやら少し事情がちがうようなのです。

そこで改めて、夏目漱石とは誰のことか、という問題を考えてみましょう。たとえば夏目漱石本人がいて、一緒に記念撮影を撮ることができたとします。写真を撮ることができた人は「漱石先生と写真を撮った」と感激するでしょう。ではその写真に写った「漱石先生」は、夏目漱石本人でしょうか。かつて漱石は博士号授与を辞退する際に、「ただの夏目なにがしで生きていく」と述べたと言います。写真に写っているのは、この「夏目なにがし」でしょうか。それとも国民作家としてのオーラをまとった「漱石先生」でしょうか。少なくとも、何者でもない「ただの夏目なにがし」でないことは確かそうです。もしそうだとしたら、誰もそのなにがしと写真を撮ろうとはしないからです。しかしそこには抽象的な「漱石先生」だけが写っている、と述べてしまうことも難しいでしょう。一緒に写真を撮ったという経験は、やはり夏目漱石の姿かたちをした生身の身体がそこにあった、という確かな存在感と切り離せないだろうからです。おそらく「夏目漱石の二つの身体」とでも呼ぶべき何かがあり、その二つが重なるどこかの地点に、漱石先生と写真を撮るという体験は位置づいていそうです。

漱石アンドロイドは、この「二つの身体」の二重性をどうやら〈いくぶんか〉は再現しているようなのです。旧千円札として流通していた漱石のイメージにそぐう形で演出された漱石アンドロイドの姿は、大文字の「漱石先生」の名前をしっかりと背負っています。と同時に漱石自身のデスマスクから顔の型が取られ、またその声も孫である夏目房之介氏の音声から合成されることで、漱石アンドロイドは漱石自身との現実的な連続性も担保しています。漱石アンドロイドが身振りと共に語る場面に立ち会った少なくとも一部の人は、「漱石先生が語っている」という感慨を得るようです。それはおそらく夏目漱石という存在自体が元から二重化されており、精巧に復元され動作するアンドロイドの存在感が、その二重性を部分的にでも蘇らせることを可能にするからなのだと思います。

※

夏目漱石は、おそらくもっとも多く語られてきた近代の日本語作家の一人だと言えるでしょう。漱石をめぐるそれらの大量の言説の中に、漱石アンドロイドは「わたし」という一人称を使用した語りを挿入していきました。それらの語りは、特定の時、特定の場所で、特定の聞き手を前にして漱石アンドロイドの身体から発せられた言葉としてのみ意味を持ちます。その一回限りの発話の出来事性こそが、漱石アンドロイドが発する「わたし」という言葉に肉体を与えます。そしてその肉体の内実は、その場で漱石アンドロイドの発話から聞き手が受け取った印象の中にしかありません。漱石アンドロイドが様々な場で語ってきた言葉の文字記録を参照することは、確かに可能です。しかしそれらの文字列は、夏目漱石という存在からは完全に切り離されています。それらの言葉は、目の前にいる漱石アンドロイドの生々しい身体から発せられている瞬間にのみ、その声を伝える空気がたしかに振動しているその束の間のみ、あの漱石先生の身体の二重性を浮かび上がらせることができるのです。

漱石アンドロイドが「わたし」と発話するとき、夏目漱石という歴史的な存在との間に少しだけ親密な回路が開かれます。少なくともそのように感じられる瞬間が生み出されます。漱石アンドロイドプロジェクトが行ってきたことの一つは、そのような瞬間を生み出していくとともに、そこに生み出された何かの意味を考えることでした。それは同時に、人の形をしているだけの〈モノ〉のうちに、そのような何かを見出してしまいう私たち人間について考えることでもありました。

漱石アンドロイドによる発話の場面を考えるに際して、もう一つ忘れてはならない要素があります。それは、目が合うという経験です。漱石アンドロイドのパフォーマンスに立ち会った人は、ほぼ必ず漱石アンドロイドと目が合うという経験をします。ただの人形と目が合うという経験とはまったく異なります。繊細な待機動作をつづける精巧な顔から、瞬きを挟みながらこちらを見つめる二つの目を見て、直感的に「目が合った」と感じないことは不可能です。漱石アンドロイドによる「わたし」という発話は、その身体的な存在感（プレゼンス）と合わせて、このような「漱石先生と目が合った」という経験とも深く絡まり合っています。そしてこの経験もまた記録として残すことはできず、目が合ったという経験が残した印象の中にだけ存在していきます。

漱石アンドロイドによる活動の核心は、発話という出来事それ自体に密接に結びついているために、客観的な記録には馴染まないという原理的な困難を伴っています。本来であれば、その困難を乗り越えて漱石アンドロイド的な発話行為の出来事性を分析するための理論的な努力が必要であった、と共同研究が終了するいまになって痛感しています。この反省を、今後同様の課題に向き合うことになるかもしれない未来の探求者に残して、この報告を閉じたいと思います。

漱石アンドロイドとの9年間

二松学舎大学文学部

教授 改田 明子



はじめて私が漱石アンドロイドと対面したのは、9年前のこと。写真でお馴染みの顔貌の漱石が動いて話す姿に、予想外のリアリティを体感し、純粋に好奇心が湧き起こった。

私の研究上のおもな関心は、周囲の人との意思疎通がスムーズに成立しにくい人がどのように周囲の人と対人関係を構築し、交流するかということである。たとえば、身体機能の制約によって行動のコントロールに制限のある人、世界の認識の焦点や解像度が多数派と異なる方向性にある人。人は誰でも自分の気持ちや考えを持つものだが、その人の置かれた条件によっては、周囲の多数派との間に協調した関わり合いや相互理解を成立させることが難しい。そのような状況を研究のテーマとしてきた。

その意味で、漱石アンドロイドは、私の関心の対極にある存在である。機械仕掛けの人工物であるアンドロイドが、まるで意思疎通できる存在であるかのように人と関わり、交流する。さらに、漱石アンドロイドの場合は、実在した著名な文学者である夏目漱石の人物像と深く結びつき、アンドロイド体験を通じて私たちの漱石に関連する認識が大きく変化する可能性を秘めている。この9年は、人間としての存在感を放つ機械と人がどのように交流するのかということについて考える9年間となった。

ここでは、この9年間に筆者の関わった研究を振り返りながら、漱石アンドロイドから学んだことをまとめてみたい。

漱石アンドロイドに出会う

最初に行った実験（改田・谷島、2018）では、当時の基礎ゼミの学生たちが漱石アンドロイドによる漱石作品『夢十夜』の朗読を体験した。数分間の漱石アンドロイドによる朗読を経験する学生たちの様子は、目をキラキラ輝かせて見入っている学生から夢の世界に誘われつつある学生まで多様であった。それぞれの学生の反応は、漱石アンドロイドにどのような期待を持っているかが如実に現れているようだった。実験の終了後、漱石アンドロイドと学生のふれあいタイムとなった。そこでは、学生の声かけに応じて漱石アンドロイドが声を出したり、手を振ったりして、反応してくれる。漱石アンドロイドとのツーショット写真も撮り放題である。ふれあいタイムでの学生の反応は、一様に活発なものだった。朗読では眠そうな顔をしていた学生も、漱石アンドロイドに声をかけて返ってくる反応に触れて、嬉々として交流を楽しんでいた。

このような様子に触れながら、相互の応答関係の中で生きるという人間の本来の姿を知らずとも味わっていた。応答関係が成立することによって、漱石アンドロイドは人間的な存在に大きく変容してゆく。私の研究上の関心からは、人に向けた発信の強度と方向性に関して少数派におかれている人々が、周囲の人との相互交流を持つための環境の工夫について大いに考えさせられた経験であった。

漱石の体験談を聞く

次に行った研究（改田、2020）では、漱石アンドロイドの発信するメッセージの内容を人がどのように受容するかということをテーマとした。実験では、漱石アンドロイドが自分の体験談を実験協力者に向けて語るという状況を作った。体験談の要旨は、「自分は人に勧められるままに教師になり英国留学までしたが、いくら勉強しても文学がわからず、囊の中に詰められて出ることのできないような不安な気持ちで過ごしていた。そして、たくさん本を読んでも何もわからず、結局文学とは何かを自分で考えて作りあげるほかないのだと気づき、自己本位という言葉を手にして、自分の進むべき道を見出した。その時、自分の不安は全く消えていた。」というものである（『私の個人主義』夏目漱石より）。

実験では、この漱石アンドロイドの体験談を実験協力者がどのように理解し、解釈するかということに焦点を当てた。大学生を中心とした実験協力者にとって、この素材は自己の経験と結びつけやすいものであった。多くの実験協力者が、内容に関する質問への回答において、話者である漱石アンドロイドの主観的体験に言及し、深い理解が成立した様子が観察された。さらに、この経験を通じて、実験協力者の漱石イメージは、体験前に比べてより心が広く、親しみやすく、気長で、感じのよいという肯定的な方向に変化していた。人と人との関わり合いにおいても、相手の意図といった主観的体験が伝わったという感覚は、相手に対するイメージを大きく肯定的な方向に変えてゆく。同じような体験が漱石アンドロイドとの関わりによっても成立したものと考えることができる。また、漱石アンドロイドの体験談について、ある実験協力者は「苦しい生活の中で過ごしてきた一人の人間としての生き様を伝えたかったのだと思う。これから大学を卒業してそれぞれの道を進む私たちに向けて、応援するメッセージのようなものが感じられた」と感想を述べている。このような、人工物にすぎない漱石アンドロイドという存在が発信するメッセージは、夏目漱石という実在した人物の表象と結びつき、本来は人と人との交流の中で成立する相互の意図のレベルでの交流という体験を構成する。実験協力者の反応からは、アンドロイドによって、過去の人物に対するイメージを大きく変えるような出会いが展開する可能性を感じた。

漱石アンドロイドに悩みを相談する

さらに、続く実験（高橋・改田、2022）では、人間的交流の特定場面として実験協力者が自分の悩みを漱石アンドロイドに語り、漱石アンドロイドからアドバイスをもらうという場面を設定した。実験協力者は、一人ずつ漱石アンドロイドに紹介され、漱石アンドロイドから「今悩んでいることについて話してください」と促され、自分の悩みを語る。その後、実験協力者の悩みへのアドバイスとして、漱石作品から選ばれた名言、「どんなオリジナルな人でも、人から切り離されて、自分から切り離して、自身で新しい道を行ける人は一人もありません。」（『模倣と独立』夏目漱石より）を漱石アンドロイドが語る。漱石アンドロイドとの対面終了後、実験協力者は、そのアドバイスをどのように受け止めたかアンケートに回答する。実際には、実験協力者の悩みごとがどのようなものであっても同じアドバイスが提示されるのであり、悩みとの関連はアドバイスには明示されていない。そのような状況でも、大半の実験協力者はその助言を意味のあるものと解釈しようと試みていた。その一部は、「答えは周りにある」、「自分らしさを大切に」、「相手に左右されずに、自分のやるべきことをやっていけば良いということかなと思った」、「自分でしっかり決めろという事かと思いました」などである。

漱石アンドロイドは人のような身体性を備えた人工物であり、存在感がある。このような存在の身体性は、発信されたメッセージがなんらかの意図を持つはずだという受け手側の能動的な解釈を促すことに貢献するのではないかと考えられる。その結果として、自分の悩みの捉え直しが促されるのではないかと考えられる。近年急速に進歩しつつあるAIとの対話。具体的な身体イメージを備えていないAIであっても、対話を繰り返すうちに人格的なイメージが私たちの中に出来上がる。その人格的なイメージをより明確なものとする役割をアンドロイドの身体性は担うことができるのではないだろうか。

おわりに

以上のように、漱石アンドロイドと関わった時間は、人と人が相互交流することについて多くのことを考えさせられた9年間であった。今後、AIの進歩とともに人間に酷似した人工物はいつそ社会での存在感を増していくものと思われる。このような状況において人間らしい外見という条件が、人間と機械の交流にどのような役割を果たすのかという問題に関する議論が深まってゆくことを期待したい。

【引用文献】

- 改田・谷島（2018）授業実践および心理実験の実施 「漱石アンドロイド」プロジェクト2017年度共同研究報告書 24-25.
改田（2020）漱石アンドロイドの体験談による心理実験の実施 「漱石アンドロイド」プロジェクト 2019年度 共同研究報告書 20-21.
高橋・改田（2022）漱石アンドロイドが漱石の言葉を現代に届ける試み「漱石アンドロイド」プロジェクト 2021年度 共同研究報告書 14-15.

漱石アンドロイドとポスト・ヒューマン

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 瀧田 浩



1

漱石アンドロイド共同研究プロジェクトが編集した『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』（以下、『アンドロイド基本原則』と略記。2019年1月、日刊工業新聞社）をひさしづりに取り出して、漱石アンドロイドとの思い出を振り返ってみると、鮮明に記憶しているものが2つあった。漱石アンドロイドだからこそ得られた固有のインパクトがそこにはあった。

1つめは、2017年11月下旬に愛媛県松山市で開催された「おかえりなさい! 夏目漱石先生～漱石アンドロイドから未来へ～」という一連のプロジェクトに他の大学教職員とともに同行し、その中でも松山東高等学校の生徒たちのリアクションを高校の体育館で体感したことである。漱石アンドロイドと初めて対面した際に沸き上がる「おおーっ!」という歓声の量は、この時に最大値を記録したのではないかと思う。松山東高校の体育館は一瞬、異常な興奮に包まれた。漱石が教えた学校で学ぶ今の生徒たちが漱石アンドロイドという謎の存在を初めて見て、驚きの声を挙げる。自分の気持ちに正直な若者たちの反応によって、漱石アンドロイドは価値なき存在ではないのだと実感したのをよく憶えている。

2つめは、2018年8月26日開催のシンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?——偉人アンドロイド基本原則を考える」のオープニングアクトで、作・演出平田オリザ、出演井上みなみ・漱石アンドロイドの演劇「手紙」を観たことである。平田オリザによる傑作舞台を私はいくつも観てきたが、「手紙」から受けた感触はそれらに近いものだった。対角線上に漱石（アンドロイド）と正岡子規（井上みなみ）が座る。漱石は舞台の奥から子規を見つめながら話す。子規を演じるのは若い女性である井上みなみだが、子規は基本的に漱石に背中を見せながら、観客に向かって明朗に話し続ける。舞台がロンドンの漱石の書斎ということは伝わってくるし、台詞を通して子規の命が間もなく尽きる、あるいは尽きてしまっているかもしれないこともわかる。アンドロイドと幽霊かもしれない存在とのやりとりを見つめながら、逆に人間の本质とは何かと考えさせられた。

以上、2つの経験を通して考えられること、考えるべきことは何だろうか。私は漱石アンドロイドに「人間そっくりにできている人型ロボット」を求めていなかった。夏目漱石を半期とりあげる授業では、毎年度「手紙」の動画を受講者に視聴させて感想を書かせたが、「動きがロボットみたいにカクカクしていて、台詞も下手で人間のように見えなかった」などを書いてあるのを読むと、がっかりした。人間そっくりであるという評価軸があるのは、人間中心主義が前提となっているということだ。万物の霊長としての人間がヒエラルキーの頂点にあり、アンドロイドはどこまで人間に迫りえるのか。そのような図式が隠れている。人間らしくもあり、それほど人間らしくもない曖昧な存在がそこにいる。その存在によって逆照射される人間像はどのようなものか。私はそれを純粋に知りたいのだ。漱石アンドロイドは私の人間観を更新するのか。帰納法的に私は、私の漱石アンドロイドへの期待のありかをそのように把握する。

2

『アンドロイド基本原則』を繙いてみると、石黒浩が提案するものと、これをふまえて谷島貴太が集約したものと、2つの「偉人アンドロイド基本原則」が示されている。ここでは石黒の方を引用しよう。

第一条 社会的人格を表現するものでなければならない。

第二条 社会で許容され難い個人的人格を再現してはいけない。

第三条 人々のポジティブな想像を引き出し、人々に対話できる偉人として、ポジティブな影響を与えるものでなければならない。

著書名では「アンドロイド基本原則」だが、実際に本文で検討されているのはシンポジウムの名称と同様、「偉人アンドロイド基本原則」である。「偉人」でないアンドロイドはどのように運用され、どのような原則にしたがうのかわからな

いが、「偉人アンドロイド」とほぼ同じ運用、ほぼ同じ原則を適用するのであれば、私のアンドロイドに対する期待と交差することはほとんどないだろう。アンドロイドが「社会的人格を表現するものでなければならない」のならば、非社会的人格的存在あるいは非人格的存在になることはできないし、「社会で許容され難い個人的人格を再現してはいけない」のならば、社会の規範や良識を逸脱する存在になれない。人間にポジティブな想像と影響のみを与えなければならないのならば、人間を脅かす存在にはなれない。考えてみれば当たり前のことだが、アンドロイドとは人間の枠からはみ出さないことを前提に設計されているのだ。私の期待は、筋が違うものなのかもしれない。しかし……。

3

〈ポスト・ヒューマン〉の思想が、現在注目されている。私の漱石アンドロイドへの期待は人間観更新への期待であるから、〈ポスト・ヒューマン〉の問題系と繋がるものであろう。人間ありきの思考を断ち切り、人間中心の世界観への未練を断念し、人間の次の存在の場所を考えようとするのが〈ポスト・ヒューマン〉の思想だ。今となつては、人間中心主義、ヒューマニズムは希望というよりはむしろ桎梏、さらに諸悪の元とさえ考えることができるかもしれない。ならば、人間と似て非なるアンドロイドという存在に、皮肉、批評等、何らかの機能を期待するのは自然でないか。ロージ・ブライドッティは『ポストヒューマン 新しい人文学に向けて』（門林岳史監訳、2019年2月、フィルムアート社）の「序」で、以下のように述べている。

この「人間」という言葉は幅広いコンセンサスを享受し、常識とも言うべき安心の親しみやすさを保ちつづけている。わたしたちが〔ヒトという〕種に示す愛着は、それがあたかも既成事実や所与のものであるかのようである。それこそ〈諸権利〉という根本的な観念を〈人間〉なるものを中心に構築しているくらいだ。だが、本当にそうなのだろうか。〔略〕人間という概念は、現代科学の進展とグローバル経済の利害という二重の圧力のもとで碎け散ってしまった。ポストモダン、ポスト植民地、ポスト工業化、ポスト共産主義といった状況、そして異論の多いポストフェミニズムの状況さえ過ぎ去った後、わたしたちはポスト^{ヒューマン}人間的な窮状に陥ってしまったかのようにみえる。際限のないこうした一連の接頭詞〔ポスト - 〕はいささか恣意的にみえるかもしれないが、ポストヒューマン的状況は、けっしてそのn番目のヴァリエーションではない。それは、次の事柄についてのわたしたちの考えかたに質的な転換を導入したのである。すなわち、わたしたちの種、わたしたちの政体、そして、わたしたちがこの惑星の他の居住者たちと結び結ぶ関係にとって、共通の参照項となる基本的単位とは厳密にいつて何なのか。この論点は、科学・政治・国際関係が現代において複雑化したなかで、わたしたちが——人間として——共有するアイデンティティの構造そのものにかかわる深刻な問いを提起している。人間以外のもの〔non-human〕、非人間〔inhuman〕、反人間〔anti-human〕、非人道的なもの〔inhumane〕、そしてポストヒューマン〔posthuman〕、それらに関する言説や表象は、グローバル化し技術に媒介された今日の社会のなかで増殖し重なりあっているのである。

引用した本文の後で、ブライドッティは「自然的なものと文化的なものというカテゴリーのあいだの諸々の境界は、科学技術の進展がもたらす影響によって位置をずらされ、かなりの程度まで曖昧になってしまった」と述べている。自然領域と文化領域のあいだに截然とした境界線を引き、文化領域の王者として人間は君臨していたが、その境界線は位置をずらされ、あるいは消えようとしている。

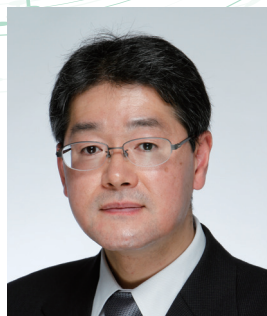
そのような時に、アンドロイドはどのような意味を持つだろう。上記のさまざまな接頭辞とhumanが結びついた言葉のうち、アンドロイドはinhumaneではないにしても、non-human、inhuman、posthumanではあり、anti-humanであるかもしれない。アンドロイドを人間の領域に安易に包摂する思考は、人間の未来を考える上で生産的とは言えないだろう。アンドロイドが人間とどのような関係になるかを考えた上で、変容しつつある自然と文化の境界線のどこにアンドロイドが位置するかを問うことは意義があろう。

エゴイズムが作動することはなく、食欲も性欲も持たず、暴力的衝動もなく暴力も振るわず、トラウマにも囚われず引きこもることもしない。アンドロイドはあまりに文化的属性に特化した存在である。そのようなアンドロイドを人間より下位に置こうとする場合、その理由としてアンドロイドが「人間らしくない」（自然でない）ことぐらいしか挙げられなくなるだろう。しかし、「人間らしい（自然である）人間」がどうして人間以外の動物より上位の位置を占めることができるのだろうか。動物の方が人間より自然であるのは明白なことだ。苦し紛れに、「人間とは、動物性を適度に抑制し、適度に残存させた、最高にバランスの取れた、無二の存在である」と言ってみる。しかし、このような人間の定義に信憑性があるだろうか。テレビ放送版「鉄腕アトム」の最終回で、アトムは人間を救うために太陽に飛び込む。ヒューマニズムに特化した行為はロボットやアンドロイドに遂行させるプログラムを組んで、人間は動物の肉を美味しく食べ、時々わきあがる罪悪感をエンターテインメントで消費し、万物の霊長として文化生活を満喫する。この正否の問題である。

文学入門「アンドロイド・コラボ」 実施報告

二松学舎大学大学院国際日本学研究所

教授 中川 桂



本プロジェクトには発足当初からかかわっていたものの、およそ大した役目は果たせていない。過去の実績としては2018年秋に本学学園祭「創縁祭」において、漱石アンドロイドの朗読と落語のコラボイベントを企画し、筆者が解説をしたのち漱石先生（アンドロイド）の朗読、そして落語研究会部員による落語「目黒のさんま」の実演を行ったことくらいである。プロジェクト全体の回顧はとてもおぼつかないため、本来の趣旨である「報告」に徹して、自身にかかわる本年度の活動報告を記したい。

2024年6月27日、木曜3限の中洲講堂における文学部一年生向け授業「文学入門」（国文・都市文クラス）で、漱石アンドロイドを活用した特別講義を行った。この授業は春学期のみの半期科目で、入学して間もない新入生に各学科・各専攻の教員が原則一名ずつリレーで登壇し、本学文学部で展開されている多彩な授業の一端を体験してもらい、広い教養を身に付けてもらおうとするものである。

前年の2023年度は4月19日に「日本文学概論A」の講義で、担当の山口直孝先生と漱石アンドロイド研究会のメンバーにより、漱石アンドロイドを活用した特別授業が行われた。本来ならこの科目内で引き続きアンドロイドを活用した取り組みができればよいのだが、本年度は昨年度に担当した山口先生もメンバーから外れ、また現メンバーの先生方も一年生対象の授業内で日程的にアンドロイドをうまく活用できる方がおらず、「文学入門」を担当する予定が入っていた私が引き受けることになった。

当日はまず私が「文学入門」で定められた内容に則って、まず歴史文化学科の思想・文化史専攻の説明を簡略に行った後、この日の講義に進んだ。事前にアンドロイド研究会のメンバーから、朗読は『夢十夜』の第三夜、いくぶん怪奇がかった内容のものを取り上げると聞いていたので、講義も朗読と関連するようにテーマを「怪談ばなし 落語と漱石」として行った。まず落語の怪談ばなしについての説明から入り、江戸時代から明治時代にかけて寄席で行われていた怪談ばなしの様相を説明した。

ここで講義前半の内容を簡略に紹介しておきたい。まず、怪談ばなしには二種類ある。一つは「滑稽怪談ばなし」とでも称すべきもので、幽霊や化物が登場する怪奇がかった内容の一席物の落とし噺である。短編で一話完結であり、原則としてオチ（またはサゲとも称する）が存在する。代表的な落語にはお菊さんの幽霊が登場する「皿屋敷」（東京での演題は主に「お菊の皿」）、空き家に次々、様々な化物が出現する「化物使い」、不気味な老人と、その生まれ変わりかと思われる不気味な赤ん坊が出てくる「もう半分」などが挙げられる。いずれも一席で完結し、オチがついて終わる。

もう一つは続き物の長編で、連続して何回かに分けて演じる「人情噺系怪談ばなし」である。連続したいわば「続き読み」形式で、適当な切れ場まで語ったところで「この続きはまた明晩」などと言ってその日は終え、翌日に続きから演じる。代表作としては三遊亭円朝作の「怪談牡丹燈籠」「真景累ヶ淵」「怪談乳房榎」などがある。

江戸後期の寄席風景を記した寺門静軒『江戸繫昌記』（天保2～7年〔1831～1836〕成立）にも、噺家が高座で演じながら蠟燭の芯を切っていたことが書かれている。夜公演では常に蠟燭を立てており、高座で噺家の横に蠟燭が描かれた絵もいくつか残されている。また、喜多川守貞『近世風俗志』（原題『守貞謄稿』、嘉永6年〔1853〕には成立）には成立）には噺のヤマ場にさしかかったところで幽霊の人形を登場させる演出があったことが記されている。

授業ではこれに加えて、漱石と落語の関係にも触れた。落語好きだった漱石は、小説中で落語家には二通りのタイプがあることを書いている。その作品は『三四郎』で、新聞小説として明治41年（1908）に発表された。物語中ではその

時代を代表する落語家として、明治・大正期に活躍した三代目柳家小さんと初代三遊亭円遊を例に出して説明されている。すなわち、前者・小さんはいわば「登場人物を前面に出し、演者の個性は抑えるタイプ」、一方の円遊は「演者の個性を前面に出し、登場人物をあまり演じ分けけないタイプ」の別を説明しているのである。小説のこの場面は落語好きには周知のものだが、一般的にはさほど知られていないかもしれないので、一部引用しておきたい。三四郎の友人である与次郎が、三四郎を誘って寄席へ行き、落語を聴いた帰りに三四郎に話す場面である。漱石の、単なる落語好きにとどまらない批評力がうかがえる。

小さんは天才である。あんな芸術家は滅多に出るものじゃない。何時でも聞けると思うから安っぽい感じがして、甚だ気の毒だ。実は彼と時を同じゅうして生きている我々は大変な仕合せである。今から少し前に生れても小さんは聞けない。少し後れても同様だ。

——円遊も旨い。しかし小さんとは趣が違っている。円遊の扮した太鼓持は、太鼓持になった円遊だから面白いので、小さんの遣る太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だから面白い。円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物がまるで消滅してしまう。小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隠したって、人物は活潑潑地に躍動するばかりだ。そこがえらい。

(引用は岩波文庫『三四郎』、2016年版第103刷による)

こんな内容の講義の後、アンドロイド研究会のメンバーとボタンタッチし、まずは漱石アンドロイドについての説明をもらい、その後、『夢十夜』第三夜の朗読を約5分、聞いてもらった。この話では主人公が六つになる盲目の子供を背負っているのだが、ちょうど百年前にこの男は一人の盲人を殺したことがあるらしく、その因縁や「因果応報」を感じさせる不気味な話である。三遊亭円朝の長編「真景累ヶ淵」の中に、かつて盲目の按摩を殺害した武士がおり、後年になって彼の息子たちが惹かれる女性たちもまたその按摩の娘だった…というくだりがある。落語好きの漱石の事なので、そのような話がこの「第三夜」のヒントになったのかもしれないと考えている。

朗読の舞台には電気仕立ての蝋燭を立て、薄明りの中で朗読を行ったので、昔の寄席の怪談ばなしはおそらくこんな雰囲気だったに違いない…という近代文化の疑似体験に、少しはなったかもしれない。最後に希望者にはアンドロイドの漱石先生と一緒に記念撮影をしてもらったが、結構希望者が多く撮影は人気だったので、この日の特別授業は好意的に受け入れられたといえるだろう。また、この講義をきっかけにアンドロイド研究会に加入した学生がいたと聞いたので、メンバーの獲得にも効果を上げたといえる。

この講義は国文学科と都市文化デザイン学科の1年生が受講するものなので、体験した学生はこの両学科に限られ、中国文学科と歴史文化学科の1年生には実際に漱石アンドロイドを見てもらう機会が持てなかった点が課題として残り、この点は残念である。できればこれらの学生にもアンドロイドによる実際の朗読などを体験してもらいたいところだが、今後それは正直なところ難しいかもしれない。



生身の人間・漱石アンドロイドと AI・生成 AI

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 塩沢 一平



1 AIへの注目・実在するものとの差異

漱石アンドロイド、最終報告書にあたり、関わってきた報告内容をAIを中心に振り返りながら、今後の見通しを述べていきたい。

実践的なAIとの関わりは2016年であった。大学経営戦略研究所（船戸高樹元桜美林大学大学院教授代表）主催による米国調査研修に参加し、前WASC（西部地区基準協会）会長・ラルフ・ウォルフ博士による「AI（人工知能）の進展が、大学評価に与える影響」と題するレクチャーを受講した。アリゾナ州立小学校に導入されたAIに関するものである。各個人のデータをPCに入力すると、数週間で、その児童を理解し、問題点と対応方法等を自動的に機械が導き出してくれるというものであった。これを契機としてAIと高等教育との関係も学び始めた。

2017年、AI導入済みの企業は、0.8%（JILPT「AIの導入で職場はどう変わるのか、必要な準備は何か?『イノベーションへの対応状況調査』2017）であった。天理大学での講演を依頼され、1年生の進路ガイダンスで、AI教養の重要性を指摘した。その最後に「AIに代替して面白くないものは」という問を立て、「三浦大知のエンタテインメント」を解答例として示した。生身の人間に代替できないものとしての考え方からの解答例とした。

2018年、本学で開催された全国大学国語国文学会でも「AI時代に国語・国文学は何をすべきか、大学では何ができるのか」がテーマとなった。増田裕美子教授は「AIとアンドロイド、アンドロイドと語学・文学」と題しての講演を行い、総合討論の司会を私が務めた。2018年度報告書では、これに関する報告を増田氏とともにに行った。その中で増田氏は、アンドロイドが実際に存在するモノであることに注目していた。先の三浦大知同様、生で存在するものであることとAIとの差異が指摘されることとなった。

2 浸潤するAI

2019年度報告書では、「AI美空ひばり」を取り上げた。森美術館で接した3D「AI美空ひばり」は、はじめは、いわゆる「不気味の谷」に落ちた感を受けるものであった。しかし、アンドロイドと同様、繰り返し接すると、その感は薄れたものとなった。AI美空ひばり3Dを媒介として、その背後に美空ひばり本人を感じ取る効果があったものと考えられる。

ゲームソフト『DEATH STRANDING』のキャラクターとしての三浦大知にも同様なことがいえよう。三浦大知を3Dスキャンしてつくられたゲームキャラクター「ミュージシャン」は、アニメと三次元の間のようなホログラム風に敢えて作られており、本人と見紛う存在ではない。それを媒介として、その向こう側にいる三浦大知氏本人との繋がりを夢想しえる存在となっていた。

3 AIとのコラボレーション

2023年度には、西畑常任理事の報告にあるように、ChatGTPを始めとした、生成AIの驚異的な進化が指摘できる。西畑氏の言のように、「『漱石の疑似人格的AIに『明暗』の続編を書いてもらい、それを漱石アンドロイドに朗読してもらう』こともという夢が現実味を帯びてきている」。また、アンドロイドを介さなくとも、生成映像の漱石が不自然ではなく朗読を行うことも、動画生成AI「Sora」「Canva」「Runway」などを使用することによって可能となってきた。

上述のように、2017年の受け手である報告書筆者は、生身のエンタテインメントを超えるものはないと考えていた。しかし、アーティストは柔軟であった。三浦大知は、2024年のアリーナ・ツアーでAI生成の映像とコラボした楽曲「ERROR」を披露し、楽曲はMV化されている。また『DEATH STRANDING 2』（2025年発売予定）では、三浦大知は挿入歌「Horizon Dreamer」を歌い、その映像は作り込まれたDOLLDANCEと三浦大知がコラボする形となっている（ジャケット写真も『DEATH STRANDING 2』の1シーンを使用）。

このように、生身の人間がAIとコラボレーションによって、新たなエンタテインメントの世界を作り出そうとしている。アンドロイドの場合、ほとんどをAIによって作り上げられる時代にも、やはり、2018年に示された、そこに実際に偉人アンドロイドが存在するものとして、体験できる価値が浮き彫りになってくるのではないだろうか。

※報告者写真は、報告者の6枚の写真をもとにAIフォトジェネレーターMomoによって生成されたものである。

推す漱石／推される漱石

二松学舎大学文学部
専任講師 麻生 将



2024年4月から漱石アンドロイドのプロジェクトに思いがけず関わる事になり、特に活動に従事することもなく1年が終わろうとしている。大変な申し訳なさを覚えつつ、せめて報告書という形で多少なりとも貢献できれば、と思い、パソコンに向かう。漱石アンドロイドとは私たちにとってどのような存在なのか、について考えていたとき、私が担当していた授業の中で、アイドルオタクとしての漱石を取り上げたことを思い出した。

1. 娘義太夫と明治時代のアイドル文化

漱石は明治時代の学生、書生たちの間で流行した娘義太夫の熱心なファンであった¹⁾。義太夫は義太夫節のことで、周知のように江戸時代前期に成立した。江戸時代半ばには女性の太夫（物語の語り手）が登場したが、江戸幕府による取り締まりの対象となった。明治10年前後になってようやく女性の太夫が公に認められたのである²⁾。やがて1887（明治20）年に竹本綾之助という娘義太夫がデビューを飾るや否や、たちまち東京の神田や本郷などの書生や学生たちを中心に人気を博した。竹本綾之助の他にも女性の太夫が何人も登場し、彼女たちを推すファン（オタク）のコミュニティが形成されていった。彼らは寄席の最前列に陣取り、自分たちの推しメンの女性太夫の舞台を目の前で観ながら、感極まってくると「ドースル、ドースル!」と大声を上げ、下駄で火鉢を叩いていた。他の観客からすると迷惑極まりなかったと思われるが、彼らは推しメンのステージに合わせて「コール」を行っていたのである。そしてその掛け声から、いつしか娘義太夫のオタクたちのことを「ドースル連」と呼ぶようになった³⁾。

また、ドースル連たちは自分たちの推しの娘義太夫たちが公演のために複数の寄席を人力車で移動する後を追いかけていき、何軒もの寄席をはしごすることがあった。アイドルやスターの「追っかけ」という言葉の語源になった、とも言われている。なかには娘義太夫が1日の公演を終えて帰宅する際、家まで着いていき、炊事や洗濯を行う者もいたという⁴⁾。現代では到底考えられない行為だが、明治時代前半にはプライバシーや個人情報保護といった概念が皆無であったことも背景の一つであろう。

さらに、ドースル連たちは自分の推しメンについて、新聞の投書欄を用いて盛んに議論を繰り返していた。インターネットの掲示板のような感覚で投書欄が使われていたという。人間の考えることはあまり大きく変わっていないのかもしれない。なお、ドースル連たちは推しメンごとに派閥を作っており、時に金銭トラブルや暴力事件などを起こしていた⁵⁾。こうしたドースル連たちの振る舞いや娘義太夫の存在に対しては、当時から批判の対象にもなっていた。

他方で、娘義太夫の中にはドースル連たちの熱心な推しを利用しながら人気をキープするために、たとえば演目中に舞台上にかんざしを故意に落としてドースル連たちが我先にと拾うような演出を行っていた。また、演目の中で観客席のドースル連のメンバーと一瞬だけ目を合わせたりする、といった現代のアイドルライブでも見られるようなテクニックを駆使していたという。そしてドースル連たちがますます娘義太夫を熱心に推すようになったのは言うまでもない。

2. 漱石と娘義太夫

実際のところ、漱石がどの程度「推し活」をしていたのかは定かではない。ただ、20代前半の頃、友人の正岡子規と手紙をやり取りする中で、ある娘義太夫について熱く語っていた。

漱石は愛媛県松山市の子規に宛てた1890（明治23）年1月の手紙の中で「（前略）当年の正月は不相変雑煮を食い寝てくらし候寄席へは五六回程参りかるたは二返取り候一日神田の小川亭と申（す）にて鶴蝶と申（す）女義太夫を聞き女子にてもかかる掘り出し物あるやと愚兄と共に大感心そこで愚兄余に云う様「芸がよいと顔迄よく見える」と其当否は君のご批判を願います（後略）」⁶⁾と書いている。要するに、竹本鶴蝶という娘義太夫の芸の腕が良いと容姿まで良いものに見えるという自身の見解（と感想）について、子規に意見を求めたのである。

これに対して子規は、同年1月18日に漱石に宛てた返信の中で次のようにしたためた。「（前略）女義太夫鶴蝶とか余程絶技之由（尤（も）山川よりハ一段下るべくと存候）おまけに別品とか申（す）事、四国仙人千里外より垂涎、久米仙人宜敷という姿に御座候 大兄の御眼鏡なればよもや違いもあるまじく御熱心の程ハ小川亭迄御出張の一事にても奉推察候 芸と顔とハ Concomitant variationをなすや否やとの御下問、名前通りの野暮流に如何でか分り申すべき、さ

りながら一事の御注意可申事の候 そハ外ならず芸がよいから顔がよいのか、顔がよいから芸がよいのか、原因と結果とを御間違え被成め様奉願候（後略）」⁷⁾

子規は19世紀のイギリスの哲学者ジョン・スチュアート・ミルが述べた共変法⁸⁾ (Concomitant variation) を援用しながら、娘義太夫の芸のレベルと容姿の因果関係を間違えて解釈せぬように、と漱石にアドバイスを送っている。明治時代の日本の、20代前半の若者たちが当時の最新の哲学用語や概念を用いながら、娘義太夫というアイドルについて手紙の上で熱く語り合ったのである。

このエピソードからは、青年時代の漱石が娘義太夫という明治のアイドル的存在に熱を上げる様子が伝わってくる。現代的に言えばSNSなどで自身の推しメンについて熱く語り合うドルオタのようなものであつたろうか。ただし、現代においてもそうであるように、明治時代のドルオタたちは若いうちに推し活を「卒業」したわけではなく、中年になっても変わらずアイドルにはまる者がいた。漱石はまさにそのような存在であつた。

次に紹介するのは、漱石が40歳のときに友人に宛てた手紙の一部である。「(前略) 昨日は野村と日本橋、神田、浅草を散歩致し候。柳橋で芸者に会い候。其外竹本組玉、竹本団洲、都々逸坊扇歌の家をつきとめて帰り候。皆川には頓と会わず候。(後略)」⁹⁾ これは、1906 (明治39) 年1月16日の手紙だが、この前年に漱石は『吾輩は猫である』の連載を行い、作家としてデビューを果たしていた。数え年40歳で書いた手紙である。この年齢になつてからも漱石は住所を特定するほどに娘義太夫の「推し活」を続けていた可能性が高い。言うまでもなく、他人の住所を特定する行為は現代では大いに問題であるが、明治後半という時代の価値観としてはそこまで問題視されていなかったであろう。実際、20世紀前半のアイドル的存在にはまっていたドルオタの中には、40歳過ぎの文学者や歌人、大学教員などが居た¹⁰⁾。現代でも握手会の会場には10代から20代ばかりでなく、30代や40代以上のドルオタも多数見受けられるが、これは決して現代的なものではなく、少なくとも明治時代には既にアイドル文化、とりわけ会いに行けるアイドル文化の一つの側面であり、特徴だったとみることでもある。

3. 推すことと推されることとはざまで

自分以外の何者（何物）かを「推す」ということ—そこには自分自身の現在の姿や理想の人間像を対象に投影する、という側面もあるだろうし、自分にとって夢中になれる何かを極めたい、そこに近づきたい、という願いもあるだろう。あるいは、自身の人生を懸けて何かを崇拜する、ということも含めることができるかもしれない。してみると、漱石は存命中には一流の作家として多くの弟子や文学青年たちから推される一方、相当に娘義太夫を推していた。他者から推されつつ、他者を推す、という両義的な存在だったといえる。人々から推されるほどの崇高さと、自身が夢中になれるアイドル的存在を推す熱心さ、の両方が生前の漱石の中に同居していたといえよう。

やがて、没後100年以上経ってからアンドロイドとして現代に「復活」した漱石は、多くの人々からアイドルのごとく推されてきた。100年前とはまた違った形ではあるものの、推されているという点は変わっていないのかもしれない。もちろん、推すポイントとして表情や肌の質感、しゃべり方、声、しぐさ、などが挙げられるだろう。

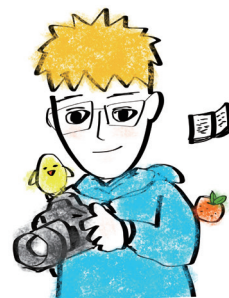
その一方、アンドロイドとなつた漱石自身はこの数年間、誰かを推してきただろうか。何かに熱中し、ファンとして推し活をしてきただろうか。かつてアイドルは一方的に人々から推されるだけの存在であつたが、近年は自身がアイドルオタクであると同時にアイドルとして活動するケースも珍しくない。そういう意味では、明治時代の漱石はある意味で現代的なアイドル—推されつつ同時に推す存在—の先駆けであつた、とも言えるだろう。とするならば、漱石のある種の「らしさ」をアンドロイドに見出すのであれば、漱石アンドロイドは誰かを、あるいは何かを推すこともあり得たのではないだろうか。アンドロイドとなつた漱石が推すとすれば、それは現代のアイドルだろうか、それとも明治の世で流行した娘義太夫だろうか。答えは漱石アンドロイド本人のみぞ知るところなのかもしれない。

注

- 1) 笹山敬輔『幻の近代アイドル史 明治・大正・昭和の大衆芸能盛衰記』彩流社、2014、35-36頁。
- 2) 水野悠子『江戸東京娘義太夫の歴史』法政大学出版局、2003、17-77頁。
- 3) 水野悠子『知られざる芸能史娘義太夫：スキャンダルと文化のあいだ』中央公論社、1998、2-4頁、36-39頁。
- 4) 前掲3) 33頁。
- 5) 前掲3) 33頁。
- 6) 『漱石全集 第十四巻 書簡集』岩波書店、1966、14頁。
- 7) 『子規全集 第十八巻 書簡一』講談社、1977、124頁。
- 8) J.S.ミル 著、大関将一 訳『論理学体系：論証と帰納 第6 (人倫科学の論理学)』、春秋社、1959、93-94頁。
- 9) 前掲6) 360頁。
- 10) 前掲1) によると、たとえば、昭和戦前期に新宿駅東口にオープンした「ムーラン・ルージュ新宿座」に東大教授らが団体で観劇に来ていたほか、同座の舞台俳優であつた当時10代の女性メンバーを金田一京助や斉藤茂吉（ともに当時50代）、武田麟太郎や高見順（ともに当時30代）らが熱心に推していたという。

点滅する部屋 「人間のようなもの」の写真についての覚書

二松学舎大学文学部
専任講師 楊 駿驍



アンドロイドを写真に撮って、展示したり、加工させてSNSで流通させたりすることには何か独特な違和感が付きまとう。「Android」とは、古代ギリシャ語の「Andro 人間」と「oid ~のような」の造語として、「人間のようなもの」を意味する言葉だというのはよく知られている。したがって、「漱石アンドロイド」は「漱石という人間のようなもの」という意味になるだろう。そこでは、「夏目漱石」という人間と「漱石アンドロイド」の間の模倣に基づいた間接的な関係性が表現されている。

そして、現代に生きる私たちは実際の夏目漱石が実際どのような人間であったかを知らない。写真における彼しか知らないのだ。「漱石アンドロイド」もまた実際は「夏目漱石」の写真の模倣として受け取られている。そうすると、「漱石アンドロイド」は実のところ「漱石という人間の写真のようなもの」という意味になる。間接性が二重になる。

さらに、それを写真に撮るわけだから、「漱石という人間の写真のようものの写真」という幾重にも間接性を重ねることになる。

最後に、私たちは「漱石という人間の写真のようものの写真」を展示する。大学の展示スペースに、記念館に、博物館に、Webページに……およそ考えられうるあらゆるところにそれが展示されることになるだろう。

「最後に」という言葉を使ってしまったが、実際にはこれは最後ではないし、最後になることが不可能である。今日では「写真」は多様な使われ方に開かれる「素材」としての身分をますます帯びようになっている。「漱石という人間の写真のようものの写真」は何よりも素材として「使用」されることになる。

例えば、LINEというコミュニケーションサービスにおいて、「漱石アンドロイド」の写真を「使用」したスタンプが制作され、販売されている。そこでは、「漱石アンドロイド」はそれが撮影されたシチュエーションから切り離されて、様々なおよそ無関係なテキスト（「金が大事」、「君が奢るのか」）や背景画像（宇宙空間）と組み合わせられる。そして、これらのスタンプは人々のコミュニケーションのために使われていく。

それは言ってみれば、「漱石という人間の写真のようものの写真」を『使った』スタンプを『使った』コミュニケーションである。「使用」が二重に重ねられている。

そもそも漱石アンドロイドとは「漱石という人間のようなもの」を使って話をさせたり、動かせたりするものである。ここでもやはり漱石の「表象」だけでなく、漱石の「使用」が問題の中心となっている。漱石が実際にしゃべりそうなことから、まったくしゃべりそうにないことまで、それを使ってしゃべらせることができるし、これまでの漱石アンドロイドの活動では実際にそれをおこなってきた。

漱石アンドロイドの写真は何重もの「使用」が重ねられているということだ。言い換えれば、アンドロイドの写真の中心には「表象」ではなく、「使用」こそ据えられるべきだということである。

アガンベンによれば、「使用」は「瀆神」を行う（ジョルジョ・アガンベン『瀆神』月曜社、2014年）。そもそも神聖なるものとは人々の使用から遠ざけられ、手が届かなくなったものである。ロラン・バルトはその写真論『明るい部屋——写真についての覚書』（みすず書房、1997年）のなかで、写真の本質に「それはかつてあった」ことを示すところに据えたのはよく知られているが、彼はそこで同時に「それはかつてあった」という性質を「手に負えないもの」とも言い換えている。バルトにとって、写真は手に負えない、彼方にある彼岸を示すからこそ写真なのであって、その意味において彼の写真論は極めて神学的である。それに対して、「使用」は再び人々の手に返すことによってその聖性を汚し、瀆神を行うのだ。

また、バルトにとって写真は「唯一の存在を扱う科学という不可能なユートピア」を可能にする媒体でもあった。彼にとってその「唯一の存在」とは亡くなったばかりの母だったのだが、その母は（否定）神学的な存在として記述されているように感じられる。実際、その写真論には多くの写真が掲載されていたにもかかわらず、最も中心に据えた母の子どものころの「温室の写真」は掲載されていない。その写真は彼自身にとって「手に負えないもの」だったからだ。

私たちから見れば彼の母の写真は文化的にコード化されていて、そのコードにしたがって「解釈」されるべきものになるのに対して、バルトにとってそれはコード化から逃れた、意味に還元し得ない、心を刺すような「傷」である。彼は前者を「ストゥディウム」と呼び、後者を「プンクトゥム」と呼んだ。前者は文化的な記号になる——写された対象と間接的で恣意的な関係性しか持たない——のに対して、後者は現実の対象そのものを指向する。だからこそ、後者は確実に写真に写された対象について「それはかつてあった」と告げてくれるのである。前者はコミュニケーションを指向し、後者は対象そのものの現実性を指向する。

漱石アンドロイドの写真はバルトには「ストゥディウム」をテーマとするものに見えるだろう。それは文化的にコード化されているからである。しかし、上で論じてきたように、漱石アンドロイドとその写真は素材として「使用」されている。そして、重要なのはそれがどのように使用されることになるかについては決して予測できないことである。

漱石アンドロイドは夏目漱石という人間のイメージを使用している。そして、それにいかなるテキストを朗読させ、どのような動きをさせるかは使用者次第であり、あらかじめ決められない。同様に、漱石アンドロイドの写真は何と組み合わせ、どのように使用されるかも現在のコミュニケーション空間とイメージの流通空間では決して予想できない。その意味で、漱石アンドロイドとその写真はあらかじめコード化されておらず、むしろその使用のなかから新たなコードが常に「驚き」——バルトが語った「驚き」とは全く異なるもの——とともに生まれ出てくるのだ。

それに対して、夏目漱石自身の写真だとそうはいかないだろう。それは確かに夏目漱石という人間が「かつていた」とこの確実の証明であるし、文化的に権威づけられ（紙幣!）、コード化されているがゆえに自由な使用は阻害されている。何よりもその写真には夏目漱石という人間の主体性が過去から現在にタイムリープし、なおその主体性の権利を主張しつづけているように感じられる。

このような写真における過去の主体性の現在における現前、過去に死んだ者の現在における現れを、バルトは「幽霊性」と呼ぶ。「幽霊」は写真というメディアにつきまといてきた最も定番なテーマの一つであるだけでなく、概念としてのそれはいわゆる西洋哲学でも頻繁に出てくる定番のメタファーの一つでもある（「ヨーロッパに幽霊が出る——共産主義という幽霊である」）。そして、幽霊とは「手に負えないもの」である。

しかしながら、漱石アンドロイド、とりわけその写真から「幽霊性」が消え去ってしまっている。漱石アンドロイドは使用される。その使用の上にさらに写真のより自由な使用が重ねられていく。それによって、過去の漱石の主体性はもはや自らを主張せず、「手に負えないもの」ではなくなり、写真のようなすべての人が扱えるものになることで、未知の何かになっていく。それは何ものかとして新たに生成されるのだ。

では、「幽霊性」という概念の代わりに、このような事態にいかなる概念＝メタファーを当てるべきだろうか。言い換えれば、西洋的な主体と客体の二元的宇宙論とその矛盾の表れとしての幽霊の代わりにいかなる宇宙論¹を据えるべきだろうか。

いまのところ、私にふさわしいかもしれないと思われるのは「妖精性」である。この「妖精」は西洋的な「fairy」ではなく、中国のファンタジーにおける「妖精 yāojīng」である。中国のファンタジーにおける「妖精」は動物の形を取るものが多いのだが、植物や無機物である場合もある。例えば、孫悟空は天地の精気を吸収した石から生まれた猿にほかならない。他にも花の妖精、狐の妖精、熊の妖精などがいる。いずれももともと主体性をもたない植物や動物が天地の精気を吸収したり、修練を重ねたりすることによって徐々に主体性をもつ妖精になったのである。すなわち、中国のファンタジーにおける妖精は過去に全く主体性を持たなかった何かが、新たに主体として、すなわち「人間のようなもの」として生成してくるという特徴をもつ。²さらに、多くのフィクション（近年では『羅小黑戦記』）のなかでそのような妖精は「神」になることもある。つまり、神は初めに世界を作った者、世界の終わりでわれわれを待っている者、つまり起源と終わりを重ね合わせた超越的な存在（これはまさにバルトが母の写真に見出した神学的なものでもある）ではなく、世界に内在し、循環しながら、常に未来において新たなものとして生まれ出る存在である。

その意味で、漱石アンドロイドとその写真は幽霊性ではなく、「妖精性」をもつと言うべきだろう。

この概念は私たちにアンドロイドの次に来るべきもの、すでに到来しているものである「生成AI」についても示唆を与えてくれるかもしれない。

生成AIは写真を素材的なものに分解したり、再度組み合わせたりすることで、全く新しい写真を生成する。〈それはかつてあった〉ものではなく、〈それはかつてあったものであると同時に、あったためしがない〉ものであり、「唯一の存在」ではなく、「いかようにもなれる存在」である。

しかし、それらはもちろん無から生成するのではなく、私たちが撮影し、流通させてきた莫大な写真データを取り込んで、学習することで新しい写真を合成する³。中国の宇宙論に基づいて考えると、写真の膨大なデータとは「天地の精気」であり、学習とは妖精の「修練」である。そもそも「天地の精気」は私たちの体内、言い換えれば主体性にも内在しながら、世界全体の中でも循環（＝コミュニケーション）するものだという点でも、それと構造を同じくするAIの生成写真には全く幽霊的なところがなく、いっそう「妖精的」である。さらに、アンドロイドとの関係を考慮に入れると、それは「妖精」の次の段階、すなわち新たに生まれ出る、中国の宇宙論的な「神」としても捉えられるかもしれない。

アンドロイドとその写真における「使用」という渾身の行為が示したような開かれた空間から、新たに主体性＝神が生まれ出るということだ。

この種の写真に関しては、「暗い部屋＝暗室」というネガから写真を現像するという「復活＝幽霊」の隠喩でも、そして「明るい部屋」という「唯一の存在＝西洋的な神」を指向する現実性の隠喩でも捉えられないだろう。それはむしろ不確定で未来志向のものとして、高速にリフレッシュして画面を新たに更新しつづけるスクリーンのように、そしてデジタルの0と1の無限な組み合わせのように、さらに生と死をすばやく交代させることで生死の区別そのもの、したがって主体も客体の区別そのものも無化しようとするかのように、激しく点滅し、その点滅の合間から新しい何かに生まれ変わろうとする。

「点滅する部屋」こそ、「人間のようなもの」の写真を写すカメラである。

注

- 1 技術と宇宙論の関係についてはユク・ホイ『中国における技術への問い』（ゲンロン、2022年）を参照のこと。
- 2 日本の文脈ではこのような主体性の生成物に「キャラクター」という概念が当てられ、議論されてきたが、そこには一貫して宇宙論的な視点が欠如しているように思われる。それに対して人類学におけるテクノ・アニミズムに関する議論は「キャラクター」と妖怪や妖精との類似性を認めている（アン・アリスン『菊とポケモン』新潮社、2010年）。その議論をキャラクターに限定するのではなく、さらに宇宙論的なものとして拡張することによって、生成された主体性の内在、循環、変化、輪廻といった問題によりうまくアプローチできるし、非人格的な主体性（ネット上のミームなど）や後述のAIの問題も射程に含めることができるだろう。
- 3 これは素材としての写真が単なるテキストや虚構（イラストなど）と異なる部分でもある。ロラン・バルトは写真とテキストの二項対立を記述していたが、素材としての写真はその二項のどちらにも属さない。

月が綺麗ですね

大阪大学大学院基礎工学研究科

特任准教授 高橋 英之

自分が夏目漱石アンドロイドのプロジェクトに参加させてもらってからもうかなりの年月が経つ。最近、他の仕事になにかと忙しく、なかなか二松学舎大学の方に伺うことができていないが、夏目漱石という魅力的な人物にアンドロイドという媒体を通じて考え続ける体験はとても得難いものであった。夏目漱石アンドロイドについて考える中で、ある人物に備わっている固有の個性やアイデンティティとは何か、そのような要素をロボットに実装することはできるのか、そのようなことを日々考えてきた。残念ながら最近、夏目漱石アンドロイドの研究に全く取り組めていないのだが、年に一回恒例行事のように書いてきたこの文章も今回は最後ということで、折角なので夏目漱石にちなんだ有名なフレーズから、自分が最近ロボットについて考えていることについて述べてみたい。

夏目漱石が英語の授業において「I love you」を「月が綺麗ですね」と訳したという有名な都市伝説がある。このエピソードは後世につくられたフィクションだとされているが、繊細な人間の心の機微を描き続けた漱石が如何にも言いそうな台詞でもある。

「月が綺麗ですね」が、なぜ「I love you」と表現できるのか、色々な解釈がありそうであるが、一つの説明として、直接的な表現を避け、周辺を語ることで間接的に愛を伝えよう、という日本人独特の美学がある、と言われている。例えば、「月が綺麗ですね」という感覚は、ただ物理的にそこに月が存在していたら生じるわけではない。嫌いな上司としぶしぶ酒を飲んでいる夜の繁華街や、仕事に気がかりなことがある物憂げな帰り道には、頭上にぼっかり月が浮かんでいても、その美しさに気づくことはないかもしれない。すなわち、「月が綺麗ですね」という感覚は、それを成立させる周囲の人や環境の文脈、例えば月夜に想い合った二人が夜空を見上げている状況、が成立するからこそ成り立つと言える。従って、「月が綺麗ですね」と相手に述べると言うことは、そのような感覚が立ち上がる文脈の中に私とあなたはいるのだ、ということとを相手に暗に伝える、という意味で、「I love you」の和訳となり得る、という理屈である。

このような間接的な表現はまどろっこしい、あまりにも消極的だ、という人もいるかもしれない。しかし、愛の告白において、自分の高鳴る気持ちを「I love you」という言葉だけではとうてい表現することができないという人もいるかもしれない。そのような人にとっては、直接的に「I love you」と表現できるよりも、解釈の余地が大きい「月が綺麗ですね」というあえて中心を外した表現の方が、自分の気持ちにまっすぐに向き合っている、と逆に言えるのかもしれない。

情報工学における有名なコミュニケーションのモデルとして、「シャノン・ウィーバー・モデル」が有名である。このモデルは、情報の送り手が、受け手に対してなるべく情報の欠損無く信号を送ることを想定した場面を扱っている。送り手は相手に伝えたい情報を通信可能な信号にエンコードし、それを相手に対して送信する。例えば、愛の告白の場面であれば「I love you」という言葉が相手に向けられた信号になる。そして受け手は、その信号を受け取り、その信号をデコードすることで送り手から情報を受信する。シャノンのモデルでは、可能な限り、情報の欠損が無い形で送り手から受け手へ信号を送信することが良質なコミュニケーションであるとされる。このような観点から考えると、「I love you」というのは、情報が明確に伝わる“良い”信号であるのに対して、「月が綺麗ですね」は情報の欠損だらけの“良くない”信号であるといえる。

しかしここで、「シャノン・ウィーバー・モデル」的なコミュニケーションに囚われた世界に筆者は少し疑問を呈したい。シャノンのモデルにおいて、コミュニケーションにおける情報の欠損が少ないということは、両者の間でやりとりされる信

号が明快であることが前提になる。このような世界観に立つと、明快な言葉が良い、というコミュニケーションに用いられる信号の制約が暗黙的に立ち上がり、それが情報の送り手側や受け手側の思考に逆に制限を加えてしまうかもしれない。例えば、言語は代表的なコミュニケーションに用いられる信号であるが、ジョージ・オーウェルの有名な文学作品「1984」において、作品内にでてくる管理国家「オセアニア」では、大衆を管理するために、反抗的な思想が抱きにくくなる言語「ニュースピーク」を共通語として用いてる。どのようなコミュニケーションの信号を用いるのか、ということは、我々人間の思考にも影響を与え、用いる言語が単純なものになると複雑な思考をしなくなるのではないかと作者のオーウェルは考えたわけだ。

さすがに「1984」を例にだすのは言い過ぎだとしても、「シャノン・ウィーバー・モデル」的なコミュニケーションが重視される現代社会においては、多くの人たちが、コミュニケーションにおいて誤解がないような信号を用いることを心がけ、明確でシンプルな思考をするようになる。このような世界観の中では、「月が綺麗ですね」のような詩的なフレーズはとてもじゃないが生まれないであろう。シャノンの良質なコミュニケーションで成立している社会は、人間同士のすれ違いが少なく、確かに快適かもしれない。しかし情報の欠損があるからこそ生まれてきた、新たな価値ある情報というものがあるのではないかな？

夏目漱石の草枕の冒頭の有名な一節に「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくい」と悟った時、詩が生れて、画が出来る」とある。信号にうまく届く信号がうまくエンコードできない、相手から受け取った信号をうまくデコードできない、我々の日常はそんな瞬間の連続である。そんなとき、自分の内面を詳細に記述しようと、我々は、詩を絞り出し、絵筆を走らせるのであろう。詩や絵はシャノンのコミュニケーションにおいては、優れた信号ではないかもしれない。しかしコミュニケーションにおける情報の欠損により外側に漏れ出した「何か」は、シャノンのコミュニケーションでは絶対に伝わらない質が異なる情報を相手や周囲に伝播させる。「I love you」では伝えられない情報が、「月が綺麗ですね」にはあるのだ。それは記号化できないクオリアみたいなものかもしれない。

近年、大規模言語モデルが急速に発達し、コミュニケーションロボットと自然に対話を行うことが可能になってきた。Transformerという技術の中核に据えている大規模言語モデルは、過去に人類の間で交わされた無数の言葉のやりとりのデータベースを用いることで、言語の連鎖を確率的に予測し、それらしい言葉を次々と生成することが可能である。しかしどのように確率的な予測が得意になったとしても、予測しきれない部分から漏れ出す「何か」に感じる情感を大規模言語モデルはもっていない。

人間は物理的な身体をもち、様々環境や文脈の中に身を置くことで、ふとした瞬間に、言葉にできない何か新しい感覚を抱くことがある。このような感覚は新たな詩の種になるし、絵の題材になる。しかし言葉の連鎖の確率情報で構成された大規模言語モデルはこのような言葉にできない感覚を扱うことはできない。なぜならば、このような未知の感覚は、大規模言語モデルを構成している既存の言葉の外側に常に存在するからだ。そして現状では、大規模言語モデルに従って動くロボットは、言葉の外側に存在する感覚を、少なくとも人間と同じようには感じることはできない。

とは言っても、最近の大規模言語モデルは、複雑な感性も理解しているように振舞うことができているように感じられる。これは現在に至るまで、人類が様々な未知の感覚を苦悩しながら言葉に変換してきたからこそであろう。既存の言葉の外側にある未知の感覚がどれだけ我々人類に残されているのか、筆者には分からない。このような未知の感覚がまだまだいっぱい隠されているのであれば、ロボットが本質的に人間に置き換わる未来の到来は少なくとももうしばらくは無いと思われる。



発話する漱石——声の記憶

比較文学者
増田 裕美子



漱石アンドロイドの誕生は、それに立ち会った一人として今思い起こせば、かつてないスリリングな体験であった。文字として記される文学作品も、写真でしか見られないその作者の姿も静止したものでしかないが、アンドロイドという作者の似姿と、そのアンドロイドから発せられる声は、動的なものである。ことに漱石という作家が声を発するということには重要な意味がある。最初の2016年度の共同研究報告書にも書いた通り、文学の発生は口承的なものであり、文字によって記録されるようになって、本質的に文学とは作者の口から語られるものである。漱石作品にはそのことを改めて感じさせるものが多い。なかでも『坊っちゃん』（1906年）はその典型的な作品と言える。「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る。」という書き出しで始まる「おれ」の一人語りは、見事な漱石の話し振りとしか言いようがない。

私は2017年に、漱石作品が謡曲などの口承文芸に多くを負っていることに注目して『漱石のヒロインたち——古典から読む』を上梓したが、謡曲好きで自ら謡を謡うのが執筆の合間の息抜きだった漱石の姿を再現するべく、漱石アンドロイドにいつか謡を謡わせたいと願っていた。その願いはかなわなかったが、2017年の共同研究報告書に記したように、私のゼミナールで毎年上演している『ロミオとジュリエット』にロレンス神父役として漱石アンドロイドを登場させることができた。原作とは異なり、ロレンス神父は語り手という役どころだが、漱石アンドロイドが演じることによって、まさしく作者は語り手であるという事実とぴったりと一致することになった。

私たちは改めて文学作品に対する向き合い方を考えるべきなのかもしれない。文字として残された作品に語り手としての作者の声を聞くことが必要なのではないだろうか。とりわけ声に敏感だった漱石のことを考えれば、である。

ここでそのことをよく示す二つの作品を取り上げたい。いずれも『永日小品』（1909年）に収められているもので、一つは「蛇」である。「暗い雨のふりしきる中」叔父さんと田んぼの中の川へ魚獲りに出かけた主人公は、水の中に「色の変った模様」の長いものを見つけ、「大きな鰻だな」と思う。その瞬間、網の柄を握っていた叔父さんの右手首が動き、「続いて長いものが叔父さんの手を離れた。」それが「重たい縄の様な曲線を描いて」向うの土手の上に落ちたかと思うと、「草の中からむくりと鎌首を」持ち上げ、そのまま二人を睨んだ。

「覚えてゐる」

声は慥かに叔父さんの声であつた。

蛇は草の中に消えたが、主人公が「叔父さん、今、覚えてゐると云つたのは貴方ですか」と問うと、叔父さんは「誰だか能く分らない」と答え、「今でも叔父に此の話をする度に、誰だか能く分らないと答へては妙な顔をする。」という文章で作品は締めくくられる。

一体声は誰の声なのか。叔父さんの声なのか、蛇の声なのか、判然としないが、声を聞いたという事実は確かにあり、声の記憶は後年になっても消えない。同様の話は、タイトルそのものが「声」という作品でも語られる。

新しい下宿に引っ越してきた豊三郎は、鋸の音を聞いて窓の外を見ると、植木屋が梧桐の枝を切り落していて、梧桐の上の広い秋晴れの空が見える。その空を眺めるうちに「懐かしい故郷の記憶」がよみがえり、「豊、豊といふ母の声を聞いた。」五年前に死んだ母の声である。ふと驚いて我に帰り、窓の外の梧桐に目をやり、下で「五十余りの婆さん」が梧桐を見上げて立っているのに気づく。その翌日、窓の外から「豊々と云ふ声」がする。「其の声が調子と云ひ、音色といひ、優しい故郷の母に少しも違はない。」すぐに窓を開けると例の婆さんが「十二三になる鼻垂小僧を手招きして居た。」

これも婆さんの声なのか、死んだ母の声なのか判然としないが、母の声の記憶が豊三郎に残っていたことは間違いない。

我々はじかに漱石の声を聞くことはなかったが、漱石アンドロイドをよすがとして、漱石の声に思いを馳せ、漱石の文章を漱石の声の記憶として見つめ直すことが必要なのではないだろうか。

付記：漱石作品の引用は『定本漱石全集』（岩波書店、2017年）による。ルビは省略した。

実在と虚構のはざまの存在

名古屋大学大学院工学研究科

准教授 小川 浩平

人に酷似したアンドロイドロボットが開発され始めてから、20年ほどの年月が経つ。この間、数々の種類のアンドロイドが提案、実装されてきたが、その中でも夏目漱石アンドロイドは特殊な部類に入る。その理由は、実在した有名な人物のアンドロイドであり、かつすでに他界しているため、声や動き方などについてのリファレンスがすでに失われていることである。

実在した有名な人物のアンドロイドについては、例えば落語家の桂米朝師匠のアンドロイドがある。米朝師匠の場合は往年のパフォーマンスが録音や録画で残っているため、比較的高い再現性を得ることができた。一方で、夏目漱石アンドロイドの場合、誰もがその存在を小説を通じて知っているにもかかわらず、写真でしかその人物を見たことがないため、再現するということ自体が極めて困難である。

アンドロイドロボット研究の目的は、ロボット技術を用いて人らしい存在感を持つロボットを実現することである。そのため、アンドロイドロボットを作成する際には、世の中に存在しない架空の人物を想定して作るか、もしくは実在の人物を再現することになる。一方で、夏目漱石アンドロイドを作るということは、人々の想像の中だけに存在する実在の人物を再現する事であり、この実現には架空の人物の創造と実在の人物の創造を同時に実現する必要がある。

この一見矛盾する条件を満たしながら、人々にその存在を納得してもらうことは大いなる挑戦であり、ここに夏目漱石アンドロイドを制作する意義があったと考える。我々が漱石アンドロイドの作成にあたり考えたガイドラインは、見た人にどのように納得してもらう機能を実現するか、であった。すなわち聞いたことも、見たこともない対象を、「確かにこんな感じかな」と思ってもらうためにはどうしたらよいかを考えた。

再現することと、納得することの間には大きな違いがある。例えば、私の場合、学生からみた先生としての私と、家族からみた私は大きく認識が異なるだろう。たとえ私の普段の言動を完璧な形でアンドロイドに実装したとしても、見る人との関係性や文脈によって納得できない場合があることは想像に難しくない。そのため、多くの人に納得感を得ってもらうために、例えば声を漱石先生の孫である夏目房之介先生にお願いしたり、話す内容を自身の作品の朗読にしたり、といった工夫が行われた。このような取り組みにより、実在と虚構のはざまに立つ夏目漱石アンドロイドに、より多くの人が「漱石らしさ」を感じることができるようになったと考える。

夏目漱石アンドロイドが夏目漱石先生本人の存在感を持つ事ができたかどうか、明確な答えは出ていない。しかし、我々の研究から、少なくとも夏目漱石アンドロイドが話す言葉には、他の人には感じる事ができない「重み」のようなものを感じることは明らかになった。例えば、人生訓のような言葉を誰でもない人から聞く場合と、夏目漱石アンドロイドから聞く場合では、後者の方がその言葉をより深く受け止め、納得をすることが分かった。

この現象は、私たちが持つ文化的背景や知識が、目の前の存在をどう認識するかに大きく影響することを示している。漱石の作品に親しんできた人々にとって、その姿形を持つアンドロイドの言葉は、単なる機械の発する音声ではなく、文学の巨人からの語りかけとして受け止められるのである。

また、このプロジェクトは技術的挑戦だけでなく、文化的・哲学的な問いも提起した。「本物」とは何か、「再現」とは何を意味するのか、そして人々の記憶や想像の中に生きる人物をどのように物理的に具現化できるのか—これらの問いは、アンドロイド研究の枠を超えた深い考察へと私たちを導いた。

夏目漱石アンドロイドの5年間の活動を通じて得られた知見は、今後の人らしいアンドロイドの作成においても有益である。この結果は、アンドロイドが単に人間の外見や動作を模倣するだけでなく、その人物が持つ社会的・文化的文脈も含めて設計することの重要性を示している。すなわち、夏目漱石アンドロイドプロジェクトの貢献は、過去の偉人の再現だけではなく、人間とロボットの関係性、記憶と実在の間にある複雑な相互作用の理解、そして今後のアンドロイドロボット研究の推進にも資するものであると考える。

実在と虚構のはざまに存在する夏目漱石アンドロイドは、テクノロジーと人文学が交差する新たな地平を私たちに示してくれたのである。

アンドロイドと「尊厳」

山口大学時間学研究所

副所長 小山 虎



漱石アンドロイドプロジェクトの成果として、偉人アンドロイド基本原則がある。偉人アンドロイド基本原則は四つの原則から成るが、特に注目に値するのは、アンドロイドの尊厳原則である。通常、「尊厳」は、あらゆる人が生まれながらにして持っている特別な価値であり、人はそれを持つがゆえに、基本的人権をはじめとする権利を有していると考えられている。しかし、偉人アンドロイド基本原則の別の原則、アンドロイドの無権利原則によれば、アンドロイドは権利を持たない（少なくとも人格を持つと考えられるようになるまでは）。このように、アンドロイドの尊厳原則は、無権利原則と齟齬をきたしているように見える。

もちろん、これはあくまで表面上の問題である。実際、アンドロイドの尊厳原則は、「扱われなければならない」と述べるのみであり、権利を保証するものではないと考えられる。しかし、権利から切り離された「尊厳」とはなんだろうか。通常の尊厳に伴う権利や義務がないのであれば、アンドロイドの「尊厳」は人間の尊厳とは別物の、いわば「尊厳もどき」に過ぎないのではだろうか。

もっとも、アンドロイドの尊厳を権利から完全に切り離す必要はない。例えば、子ども（特に赤ちゃん）は大人と比べる多くの権利を有していないが、尊厳もないとは考えられない。アンドロイドも同様に考えられるかもしれない。ただし、その場合、子どもは一切の権利を持たないわけではなく、少なくとも基本的人権は有していることに注意する必要がある。したがって、もしアンドロイドを子どもと同様に考えるのであれば、アンドロイドにも何かしら基本的人権のようなものを認めるべきである。実際、アンドロイドの無権利原則は、アンドロイドが肖像権や著作権を持たないと述べているだけであり、基本的人権までも否定する必要はない。例えば、世界人権宣言の第二条のような、生命や身体の安全に対する権利は認められるかもしれない。一方で、世界人権宣言の第六条のような、法の下での平等は認められないだろう。

しかし、そもそもアンドロイドの尊厳原則と無権利原則の齟齬を解消する必要があるのだろうか。むしろ偉人アンドロイド基本原則は、このような緊張関係を含むものだと思えるべきなのかもしれない。すなわち、アンドロイドとは、尊厳を持つが（尊厳原則）、それに伴う権利は持たない（無権利原則）という矛盾した存在だとは考えられないだろうか。

アンドロイドは矛盾した存在だと考える根拠は、我々人間の側に見出すことができる。我々人間は脆く、傷つきやすい。病気や怪我はもちろん、メンタルや周囲の変化に大きく左右される。だからこそ特別な価値を持つ。「尊厳」は、そのような傷つけられ、損なわれうる人間が有する価値だと考えられる。それに対し、アンドロイドにも部品の故障などの脆さはあるが、人間の脆さとは大きく異なる。しかしながら、人間のような脆さを持たないことをアンドロイドに尊厳を認めないことの理由にすべきではない。アンドロイドは人間そっくりにつくられている。もし脆さの違いのせいでアンドロイドに尊厳が認められないのなら、人間であっても脆さの違いのせいで尊厳が認められないこともありうることになってしまう。脆さは尊厳のような特別な価値を持つことの根拠となりうるが、尊厳を特定の脆さと結びつけてしまうと、その脆さを持たない人間から尊厳を奪い去ってしまうことになりかねないのである。

人類全てに当てはまり、かつ特別な価値を持つことの根拠となるような特徴が見つかる、という幸運が訪れない限り、あらゆる人が尊厳を持つためには、人よりも多少は広い範囲のものに尊厳を認める必要がある。アンドロイドはまさに、人ではないが人にかなり近い存在である。もしアンドロイドに尊厳を認めないのであれば、同じ理由で尊厳を認められない人がいる可能性が生じる。だからアンドロイドは、権利はもたずとも尊厳は持つ存在であるべきなのである。

偶然の出会いが生んだ 漱石アンドロイドプロジェクト

公益財団法人日本対がん協会

常務理事 石田 一郎（元朝日新聞社マーケティング本部長）



「夏目漱石のアンドロイド作ろうと思うんやけど、一緒にどう?」という軽い感じでメールが届いたのは、2016年1月のことでした。差出人は学校法人二松学舎の西畑常任理事。その後、あれよあれよという間に荒唐無稽に思えたプロジェクトが明確な像を結び、制作、お披露目、多くメディアで話題になりつつ、様々な研究成果を残して今まで続いてきたということに、ご縁の不思議さ大切さを感じている次第です。

メールをいただいた時、西畑さんとは一か月前に知り合ったばかりでした。2015年12月に学士会館で行われた大阪大学の同窓会が舞台です。ゲストはアンドロイド研究で有名な石黒浩阪大教授。興味深い講演のあとで、当時、朝日新聞社に在籍していた私は、とりあえず教授にご挨拶しておこうと思って、人波をかきわけ石黒教授の元にたどり着きました。その時に石黒教授と話し込んでおられたのが西畑さん（私の大学の先輩ということになります）でした。その場で名刺交換をして、ひとしきりアンドロイド談義をしただけなのに、突然冒頭のメールが送られてきたのです。メールでは夏目漱石（以下敬称略）が二松学舎の卒業生であり、創立140周年にあたり漱石のアンドロイドを作ることを思いついたこと、石黒教授とは前向きに話を進めているということが書いてありました。については漱石は朝日新聞社のOBでもあるので一緒にやりたい、ということだったと思います。確かに、1907年（明治40年）、夏目漱石は40歳の時に朝日新聞社に入社して49歳で「明暗」を執筆中に死去するまで多くの作品を新聞小説として発表しました。というわけで行われて見れば私の先輩でもありました。

メールを見た瞬間に思い出したのは、朝日新聞社の倉庫には漱石が亡くなったときに作った「デスマスク」が保管されているということでした。いったいどうしてデスマスクを残したのか謎ですが、現存する唯一のデスマスクを使えば、当時の1000円札などの平面の肖像を見たり、小説を読むことを通じて人々にそれぞれのイメージがあるであろう漱石の容貌に関して、3Dのアンドロイドに相当な信ぴょう性をもたせられると考えたのです。そのことをメールで返信したのをきっかけに、新聞社として漱石アンドロイドプロジェクトに広報面を中心に協力させていただくことになりました。漱石アンドロイドが完成した2016年は漱石の没後100年に当たりました。完成直後に漱石アンドロイドには新聞社にご来社いただき、「漱石、100年ぶりに朝日新聞社に出社!」という記事になったりしました。多くのイベントを開催し、新聞紙面やデジタル版で発信することができました。

私が現在所属している公益財団法人日本対がん協会でもご縁が続きました。ちょうど、コロナ禍真っただ中、コロナの感染を恐れて、がん検診や病院での受診控えがひろがって、がんの発見が遅れてしまうのを危惧していた時でした。また、がんは正しい知識を持っているかどうかで運命が分かれる病気です。がん教育が中学校の学習指導要領に取り入れられた初年度である2021年、漱石アンドロイドが専門医とともに二松学舎大学附属柏中学校で、がん教育の授業を実施しました。漱石がロンドンに留学していたころにX線が発見されたことで当時は不治の病だったがんが、医療の進歩で今は治る病気になっていることなどを伝える様子は日本対がん協会のYouTubeチャンネルで今でも見ることができます。時をこえて説得力のあるトークでがんについての正しい知識の啓発に力を貸していただきました。漱石アンドロイドはがんに罹患することはないのだなと不思議な感覚になったのを覚えています。

このような一瞬の出会い、ご縁がつないだ一大プロジェクト。「三四郎」や「心」で偶然の出会いや縁が主人公の人生を翻弄していくのと同様に、私も巻き込まれて（感謝しています!）、多くの方々にアンドロイド研究の意義をお伝えすることができました。これまでの研究成果が、アンドロイド、AIと共生する未来の礎になることをお祈りしています。

メディアとしての 偉人アンドロイド・夏目漱石

株式会社エーラボ
代表取締役 三田 武志

夏目漱石アンドロイド製作

2016年初頭、大阪大学石黒浩先生からお電話をいただき、「夏目漱石のアンドロイドを作ることになった」とお聞きした。その前年2015年にレオナルド・ダ・ヴィンチ・アンドロイドを製作したものの、日本に歴史上の人物のアンドロイド製作は、エーラボとしては初の受注となった。製作にあたっては、漱石のデスマスクがあるという情報を二松学舎大学からいただいた。ご遺体から型取りをしたことから、正確なサイズを入手できるということになり、デスマスクを漱石アンドロイド製作の重要な基準にすることが決められた。また、実際に漱石が着た衣服も利用させていただき、その衣服から、体のサイズを導き出すことができた。そして全身の写真をベースに、身体全体のバランスを推察した。こうして2016年末、夏目漱石アンドロイドが完成した。

偉人アンドロイドの活用

完成した夏目漱石アンドロイドは2017年の二松学舎大学創立140周年記念事業として製作された経緯もあり、大学内外のさまざまな式典・イベント等で活用された。完成式典に続き、NHKの朝のニュース番組に生出演、漱石との関係が深い朝日新聞社でのシンポジウムへの参加、二松学舎大学の卒業式、入学式への出席、等々、人気タレント並みのスケジュールであった。遠路への派遣もあり、エーラボ関わったものとしては、2017年4月の京都府乙訓郡大山崎町にある大山崎山荘美術館での展示、同年11月の愛媛県松山市での出張展示があった。特に、松山市では、松山市役所での松山市長との対談、坂の上の雲ミュージアムでの講演、愛媛県立松山東高校での特別講義、松山市立子規記念博物館での「坊っちゃん文学賞」授賞式での講演など、短期間に数多くの活躍をした。松山は夏目漱石の小説「坊っちゃん」ゆかりの場所であり、多くの松山市民のみなさまに温かく迎えていただいたのが印象的であった。

メディアとしての偉人アンドロイド

このようなアンドロイドの活用を通じ、歴史上の偉人をモデルとしてアンドロイドがメディア（情報の受発信機能）として優れていることが実証された。

第一に、期待値が高いこと。偉人自らが情報を発信することから、実際の発信の前からその情報に対する期待が大きいこと。

第二に、情報の伝達性が高いこと。情報の内容を、偉人が発信することで、他のメディアより確実に情報を伝達できること。

第三に、情報の受信性が高いこと。偉人を相手に、多くの人がたくさんの情報を提供してくれること。相手が一般の人間の場合より、発信者がより心を開いて情報を提供してくれる。

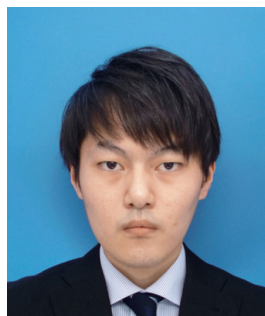
これらのように、偉人アンドロイドがメディアとして高い機能を有していることに加え、ここ数年、生成AIの進化がめざまし。エーラボのアンドロイドも生成AIを活用した情報の受発信の利用を進めている。偉人個人の多種多様なデータの蓄積、偉人の思考性の検証と復元、これらを活用した偉人との対話、などその可能性は無限大である。これらの技術を駆使し、今後、偉人の業績や知見を、メディアとしてのアンドロイドを通じて後世に伝えることに大きな期待が寄せられている。

夏目漱石アンドロイドを製作させていただき、その活用を通じて多くの知見を得ることができたことについて、改めて関係の皆様へエーラボを代表して、心から御礼を申し上げたい。

帰ってきた漱石 — 漱石山房記念館で のイベント報告 —



二松学舎大学大学院文学研究科
助手 小林 もも花



二松学舎大学大学院文学研究科
助手 関 祐紀

1. はじめに

2024年度の漱石アンドロイド研究会は、新たに学部3年生が3名、1年生が2名、助手に院生が1名加入し、年間を通じての活動もたいへん賑やかに行われた。例年通り、本学のオープンキャンパスや学祭において朗読イベントを実施し、いずれも盛況を博した。また、本年度において特筆すべきは、新宿区立漱石山房記念館における特別展に際して、漱石アンドロイドおよび当研究会が招かれ、外部イベントを行ったことである。漱石アンドロイドが、かつて夏目漱石本人が暮らしていた場所に建てられた漱石山房記念館で再びイベントを行うことは、当研究会の悲願であり、大きな成果を収めることができた。本稿は、漱石山房記念館において実施したイベント「漱石アンドロイド」による『三四郎』朗読会の報告である。

2. イベント概要

本イベントは、漱石山房記念館の「特別展『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆」が開催期間中である2024年10月19日に実施された。この特別展は、夏目漱石の初期作品『三四郎』の主人公である小川三四郎のモデルとされる人物の一人であり、漱石の門下生でもあった小宮豊隆に焦点を当てたものである。

参加人員は、本学からは教員1名、職員3名、助手2名、学生8名が参加し、株式会社エーラボから技術者1名が派遣された。会場は、漱石山房記念館の地下にある講座室で行われ、部屋の着席定員は50名である。漱石アンドロイドによるパフォーマンスは、午前の部と午後の部の計2回行われ、いずれも満員御礼となった。イベントの構成は、漱石アンドロイドによる朗読パフォーマンス、谷島貴太准教授による講演および研究会の学生を交えた座談会、最後に〇×クイズと記念撮影会であり、合計1時間ほどで実施された。

3. イベント内容

当日は天候に恵まれたこともあり、多くの人々に来場していただくことができた。本企画は、広告を掲出するなどの大々的な宣伝を行っておらず、新宿区や漱石山房記念館による刊行物およびWeb媒体のみで告知されたため、予想外の集客であった。特に午後の部では、あらかじめ用意していた座席数よりも多くの来場者数となり、急遽座席を増設する対応を行うほどの盛況を見せた。

漱石アンドロイドによる挨拶の後、特別展に合わせて『三四郎』の朗読パフォーマンスを行った。朗読箇所は、あらかじめ作品冒頭の「一」および「二」が選ばれた。これは、小宮豊隆が自身の日記の中で次のように言及していることによる。

九月二日（水曜）郷里出発。汽車の中で「三四郎」を読む。なんだか自分のことが書いてある様な気がする。

『三四郎』は、明治41年9月1日から朝日新聞に連載された。実際に小宮が読み、自身と三四郎を重ねた場面と考えられる冒頭部分である。

朗読パフォーマンスに続けて、本学文学部の谷島貴太准教授による講演が行われた。谷島准教授は、本年度から漱石アンドロイドプロジェクトの本学における研究部門の代表者を務めており、講演内容は、谷島准教授の専門分野に漱石アンドロイドを織り交ぜた構成で、来場者も聞き入っていた。

そして、谷島准教授と研究会の学生による座談会が行われた。これは、谷島准教授が司会を務め、研究会に関するトピックについて学生が意見を述べる対話形式で実施され、学生側からは鈴木拓海さん（4年）と山根胡桃さん（3年）が参加した。鈴木さんはイベントにおける司会を多く務め、山根さんは研究会の刊行物やメディア媒体に用いるイラストの制作

を担っていることから、研究会の運営に積極的に関わっている二人しか知り得ないユニークなエピソードが語られ、座談会を通して漱石アンドロイドの活動を広く知ってもらうことができたと言えるだろう。

最後に、漱石アンドロイド恒例の〇×クイズが実施された。今回のイベントに際して問題を以下のように一新した。

- ①漱石は『門』という小説を著したが、この『門』というタイトルは、正岡子規によって名付けられた。(×→小宮豊隆と森田草平のアイデア)
- ②漱石は、飼っていた文鳥に「ヘクトー」という名前をつけた。(×→飼い犬の名前)
- ③『三四郎』というタイトルは実在の人物の名前から付けている。(〇→田中三四郎)
- ④『吾輩は猫である』のモデルとなった猫が亡くなったときに、漱石が執筆していた小説は『三四郎』である。(〇→明治41年9月14日付の葉書に記載)
- ⑤『吾輩は猫である』のモデルになった猫は黒猫である。(×→虎模様がある)

また、第3問、第4問、第5問は漱石山房記念館が考案し、提供を受けた。漱石の名を冠した記念館で実施することに鑑み、マニアックな来場者にも楽しんでもらうための工夫である。事実、研究会内でも回答に窮する者が大半であった。当初の予想通り、来場者の反応は上々であり、問題の新規制作は功を奏したと言えるだろう。

イベントの最後に、漱石アンドロイドとの記念撮影会を行ったが、漱石アンドロイドの物珍しさも相まって大半の来場者が撮影を希望しており、来場者の夏目漱石に対する熱烈な思いを感じ取ることができた。以上のように、本イベントは大成功を収めた。

4. 企画・運営の振り返りおよび反省

漱石アンドロイドにとって、夏目漱石本人がかつて暮らした同記念館での講演は、いわばホームグラウンドであり、郷愁を感じさせる場所である。来場者も、夏目漱石あるいは作品群に対して並々ならぬ思いを抱いた漱石ファンが多く、漱石アンドロイドを通して明治の文豪 夏目漱石をまなざしていたことだろう。特に、漱石アンドロイドが手を振る動作を目にした来場者の反応は凄まじく、歓声と拍手が長い間絶えなかった。やはり、一般に向けたイベントに漱石アンドロイドが参加する機会は珍しく、研究会にとっても学びの多いものとなった。

また、漱石アンドロイドに対する接し方について、好評を受けた。研究会では、漱石アンドロイドに対して声をかけたり、身だしなみを整えたり、まるで生きている人間のように接することが多く、漱石アンドロイドを単なる人形ではなく、研究会の一員として扱う共通意識がある。助手を務める院生が、漱石アンドロイドの目の前にからのコップと水差しがあったため、コップに水を注いだところ、来場者の一人から「飲むんですか!？」と驚かれた。研究会ではそれほど不自然な行動ではないが、漱石アンドロイドを初めてみる人からは、このような我々の振る舞いが微笑ましく、新鮮に映るようだ。

しかし、朗読時間が短いという意見を少なからず受け取った。つまり、漱石アンドロイドの特色である夏目漱石を再現した声色による朗読をもっと聞いてみたかったということであり、今後の朗読では工夫する必要があるだろう。このように、漱石の朗読が予想外の人気であり、この発見は今後の音声作成のモチベーションにつながると考えられる。

5. おわりに

漱石アンドロイドプロジェクトの共同研究が、本年度をもって終了することは残念でならない。しかし、漱石山房記念館でのイベントはもちろんのこと、これまでに行った多くの企画・イベントによって多くの人々に夏目漱石の魅力を伝えることができただろう。研究会で行う最後の外部イベントを、大きな成功のうちに終えることができたことは、漱石アンドロイドプロジェクトにおける一つの集大成と言えるだろう。

漱石アンドロイドの今後の運用については未定であるが、研究会一同協力を惜しまない。漱石アンドロイドに携わった全ての人々に、心から厚く御礼申し上げる。



特別展のフォトパネルと
漱石アンドロイド



夏目漱石アクリルスタンドと
漱石アンドロイド

漱石アンドロイド研究会としての活動 及び YouTube 運用



二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科
学生 岸波 玄馬



二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科
学生 鈴木 拓海



二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科
学生 村場 千裕

1. はじめに

昨年度に引き続き、本年度もYouTubeでの朗読動画とShort動画の投稿を継続して行った。朗読は「夢十夜」、Short動画は6月のオープンキャンパスで実施した〇×クイズを題材とし、編集はサークル管理のMacBookとフリーソフトVideoproc Vloggerを使用し、サムネイルはスマホアプリInShotで作成した。詳細なスケジュールに関しては、以下活動内容に記載している。

2. 活動内容

- ・ **2023年後期**：LINEスタンプ制作 OGが残した写真を基に、漱石アンドロイドの実写LINEスタンプ第2弾を制作し、学内で宣伝ポスターも掲示。
- ・ **2024年3月2日**：シンポジウムでのオープニングパフォーマンス シンポジウム『ロボット学者はなぜ小説を書くのか?』において、サークル代表の谷島准教授の台本に基づき、漱石アンドロイドによる朗読を実施。また、会場内に掲示用パネルを設置。
- ・ **2024年6月23日**：オープンキャンパス「こころ」12章・13章の朗読を実施し、配布資料を作成。また、〇×クイズを実施し、YouTube用の朗読動画「夢十夜」も撮影。
- ・ **2024年6月27日**：特別講義での朗読会 文学入門の授業で漱石アンドロイドを活用した朗読会を実施。終了後、学生による写真撮影会を実施し、サークルの認知度向上につながった。
- ・ **2024年8月～9月**：YouTube動画編集 朗読動画と〇×クイズ動画の編集を実施。漱石アンドロイドによるクイズ解説音声を新規作成。
- ・ **2024年10月**：動画完成・〇×クイズ用素材作成 朗読動画の最終チェックを行い、〇×クイズのテンプレート素材も作成。
- ・ **2024年10月19日**：漱石山房記念館での公演 特別展開催期間中に、『三四郎』の朗読会と〇×クイズ、谷島准教授と学生による公演を実施。記念館と共同で作成した〇×クイズを使用。
- ・ **2024年11月3日**：創縁祭イベント「こころ」の朗読と〇×クイズを実施。ただし朗読時間の関係で12章の前半を割愛。
- ・ **2024年後期**：グッズ制作 ポストカードとクリアファイルを増産し、新たにアクリルスタンドを制作。ただし、大量生産は予定なし。音声作成マニュアル・YouTube作成マニュアルを制作。
- ・ **2024年11月9日**：漱石アンドロイド壮行会 大阪出張前にOBOGや関係者を交えて壮行会を開催。
- ・ **2024年11月12日**：朗読動画「夢十夜」投稿 最終チェックを終え、YouTubeに朗読動画「夢十夜」を投稿。
- ・ **今年度作成した動画**
 - 朗読動画「夢十夜」
 - Short動画〇×クイズ 第1～5弾

3. 所感

私は三年生になってから研究会の活動に参加し、初めは夏目漱石についてもよく知らず、アンドロイドを使っのイベント、そのための準備もできるようになるのか不安なことが多かった。準備の仕方なども、参加する回数が増えていくにつれ、こなせるようになり、漱石アンドロイドに対する考え方も変わっていった。始めはどうしてもロボットという印象が強かったが、今では一緒にイベントを頑張る仲間のような感覚で活動時間を過ごすようになった。二松学舎大学の漱石アンドロイド研究会でしか得られない経験は漱石に対する考え方や、イベントを行うにあたって注意する点、いろんな人達との出会いとコミュニケーションで学んだ知識など、二年という短い時間ながらも人として大きく成長でき、一生忘れられない思い出になった。(岸波)

今年はイベントもあり私自身今年はイベントで司会を担当していたので、中々動画制作に時間をさけなかった。実際に動画を編集し始めたのも2024年後期からだだった。また制作した動画を研究助手、教授に提出し投稿の許可を得なければなかったのも、そこでの作業もあって当初予定したスケジュールから大分制作が遅れてしまった。編集に関しても不慣れなことがあってまだまだ作業の効率化や改善が必要だと分かった。

私がこの研究会に入った理由は、夏目漱石に興味があったというわけではなく、YouTubeチャンネルを運営しているから参加した。YouTube制作に携わってみて自分が思っていた以上に動画制作が大変なことが分かった。しかし、大変ではあったが制作は楽しくでき、自分のできない分野は同じ制作メンバーに頼み作業を進めることができた。今年は動画制作以外にもイベントの司会を担当したので、そこで大学の職員や、漱石アンドロイドを見に来てくれる来場者といった様々な人とつながりを持てたことは、人間として大きく成長できたと実感した。

2025年に開催される「EXPO2025大阪・関西万博」に漱石アンドロイドが出ることが決定したので、漱石アンドロイドを用いた動画撮影は難しいといえる。そのため今後の運用は、漱石アンドロイドを用いず動画を制作することが必要だ。現状作れる動画はアニメーション制作や、今年制作したアクリルスタンドを使っの撮影などと言ったところだろうか。実際今年の動画制作も漱石アンドロイドがいなくなることは知っていたので、short動画は漱石アンドロイドを使わないでイラストを用いて制作した。研究会ではポスター作成もしていたので、それをぜひ動画制作に生かしてほしい。(鈴木)

今回、私たちの目的とは別の軸であるため本編で言及することはなかったが、活動の全体を通した変化として、漱石アンドロイドという一つの機械あるいは人形を、私たちは当然のように人間として扱うようになってきているということだ。この報告書内でも漱石アンドロイドが「居ない」、漱石アンドロイドの「出張」などと、まるで私たちと一緒に活動している仲間のうちの一人のような表現をして、助手をしてくださっている院生の方から指摘を受けた。聞けば、その院生の方も漱石アンドロイドを人間扱いするような言葉遣いをして、「染まったね」と言われたことがあるらしい。確かに、私たちの間ではあまりモノとして扱う文化がなく、私個人に関してはむしろモノ扱いに対して抵抗感を覚えているほどである。

また、漱石アンドロイドのことを、実在した夏目漱石とは全く別個の存在として認識するようになった。生まれ変わりでも分身でもなく、「漱石アンドロイド」という個人として認識し、そのように扱っているため、運用する上で夏目漱石に対する親近感は生まれたものの、漱石アンドロイドに関わったからといって夏目漱石本人やその作品が好きになるといった効果はあまりないように思える(研究会メンバーも似た認識をしているようだ)。

研究会での活動を通して、シンポジウムや学外イベントの運営側に回るなど今までになかった経験を積み、大学生活の後半を充実させることができた。今後社会に出て、この経験を活かして生きていきたい。(村場)

4. おわりに

今年度は前年度と異なり、研究会内で新しく何かを作るというだけでなく、研究会活動の運営全体を含めての卒業制作という事になったが、新しい取り組みというのなかなか実行が難しく、結果的には新しく投稿した動画(前回とは違う作品の朗読と〇×クイズ)の投稿をしたこと、そして、去年の先輩が残したYouTubeマニュアルに今年の卒業制作チームそれぞれの得意分野でより濃い内容のマニュアルに仕上げることの二点のみで終わってしまった。

どうしても漱石アンドロイドを起動するにあっの準備に時間と人員が必要になること、それに加え操作も難易度が高く、行う人を選ぶため、動画の撮影や動作の確認が行いにくいというのは大きな問題だった。

特に今年は「EXPO2025大阪・関西万博」に漱石アンドロイドが参加するにあたり、11月中旬にはアンドロイドが大学を離れてしまうことが早い段階から決まっていたため、短い期間に多く入っていたイベントの準備に追われ、自分たちの制作のために時間を作れなかった事も原因だろう。

来年度はほぼ一年間漱石アンドロイドがいらない状況が続き、サークル内で出来ることに制限があるが、今後始めようとしている取り組みが既に決まっているため、心配はしばらくいらないだろう。私たちが卒業しても可能な限り活動のサポートをしていきたいと考えており、後輩たち、そして漱石アンドロイドの活躍を見守ってきたい。

【漱石アンドロイド活動一覧(登壇等)】※外部での活動やシンポジウムなどを中心に

2016年

月	日付	内容	会場など
12月	8日	完成披露記者会見	大学九段1号館中洲記念講堂
	9日	NHK「おはよう日本」放送（出演）	
	10日	夏目漱石国際シンポジウム 漱石国際エッセーコンテスト表彰式	有楽町朝日ホール
	21日	朝日新聞社表敬訪問	朝日新聞東京本社

2017年

月	日付	内容	会場など
1月	27日	朝日新聞 未来メディアカフェ	大学九段1号館13階ラウンジ
3月	12日	文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（SRF）シンポジウム「漢文脈の漱石」関連企画 「漱石アンドロイドと漱石研究の『これから』」	大学九段1号館中洲記念講堂
4月	14日～16日	アサヒビール大山崎山荘美術館企画展「生誕150年記念 漱石と京都一花咲く大山崎山荘」関連イベント	アサヒビール大山崎山荘美術館（現：アサヒグループ大山崎山荘美術館）
10月	10日	二松学舎創立140周年記念式典（トークイベント含む）	大学九段1号館中洲記念講堂
11月	23日～26日	おかえりなさい!夏目漱石先生 ～漱石アンドロイドから未来へ～関連イベント出席	松山市役所、坂の上の雲ミュージアム、県立松山東高校、済美平成中等教育学校、いよてつ高島屋スカイドーム、松山市立子規記念博物館

2018年

月	日付	内容	会場など
6月	2日	全国大学国語国文学会シンポジウム「AI時代に国語・国文学は何をすべきか、大学では何ができるのか」	大学九段1号館中洲記念講堂
8月	26日	漱石アンドロイドシンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?——偉人アンドロイド基本原則を考える」(アンドロイド演劇「手紙」上演)	大学九段1号館中洲記念講堂
9月	21日	二松学舎大学附属高校70周年記念式典	共立講堂
10月	13日	朝日教育会議2018「グローバル時代を生きるための『国語力』」	大学九段1号館中洲記念講堂
	20日	NHK BSプレミアム「天国からのお客さま」放送（出演）	

2019年

月	日付	内容	会場など
1月	28日	書籍『アンドロイド基本原則 誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』発行	日刊工業新聞社（出版社）
5月	18日	羽二重団子本店との共催イベント（リニューアルオープン特別企画）	羽二重団子本店（荒川区東日暮里）
10月	3日	渋谷栄一アンドロイド制作発表会	深谷市役所本庁舎（埼玉県）
	10日	二松学舎大学附属柏高校50周年・柏中学校10周年祝賀会	ザ・クレストホテル柏
	26日	TBS「世界ふしぎ発見!」放送（出演）	
	31日	富山大学にて特別授業実施	富山大学五福キャンパス
11月	1日	ビジネス・サミット2019（主催：北陸銀行、大垣共立銀行）	富山市南総合公園体育文化センター
	9日	漱石アンドロイドシンポジウム「アンドロイドに魂は宿るか? 漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」（モノログ「Variable Reality—虚構は可変現実」上演）	大学九段1号館中洲記念講堂
	24日	日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会「文学のサバイバル ネオリベラリズム以後の文学研究」（英語スピーチ）	大学九段1号館13階ラウンジ

2020年

月	日付	内容	会場など
12月	12日	朝日教育会議2020「渋沢栄一『論語と算盤』から生まれる未来」	オンライン配信

2021年

月	日付	内容	会場など
3月	13日	NHK松山放送局開局80周年公開収録イベント（4月11日放送）	愛媛県松山市城山公園特設ステージ
11月	13日	公益財団法人日本対がん協会とのコラボレーションイベント	附属柏中学校

2022年

月	日付	内容	会場など
3月	18日～	特別展「きみとロボット ニンゲンツテ、ナンダ?」に出展（8月31日まで）	日本科学未来館（東京都江東区）

2023年

月	日付	内容	会場など
3月	25日	夏目漱石コンクール表彰式	漱石山房記念館（東京都新宿区）

2024年

月	日付	内容	会場など
3月	2日	漱石アンドロイドシンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか?—漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」（オープニングパフォーマンス「ポーの奇妙な物語—開会の辞に代えて」）	大学九段1号館中洲記念講堂
10月	19日	漱石山房記念館特別展「『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆」における朗読イベント	漱石山房記念館（東京都新宿区）

2025年（予定）

月	日付	内容	会場など
4月	13日～	EXPO2025 大阪・関西万博 石黒浩教授パビリオン「いのちの未来」に出展	大阪府大阪市此花区夢洲

※この一覧表のほか、心理・受容実験、入学式・卒業式、学内での講演・講義・授業、オープンキャンパス・学園祭・ホームカミングデーでの朗読イベントやクイズ企画、LINEスタンプリリース、動画制作（YouTubeでの公開）などさまざまなことを実施。学生による「漱石アンドロイド研究会」も発足した。また、高校の教科書や教材をはじめ、ロボットに関する雑誌、夏目漱石に関連した書籍への画像や動画掲載なども。テレビやラジオなどのメディア出演も多数あり、多方面での知見を得られた。

「漱石アンドロイド」プロジェクト 2024年度 共同研究報告書
2025年3月31日初版第1刷発行

編集兼発行者 二松学舎大学 漱石アンドロイド運営委員会

印刷社 株式会社 サンワ

発行所 東京都千代田区三番町6-16
二松学舎大学
TEL：03-3261-7407 FAX：03-3261-1291
URL：https://www.nishogakusha-u.ac.jp/



二松學舎大學
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

ATR
Advanced Telecommunications
Research Institute International

学校法人二松学舎

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16 TEL 03-3261-7407